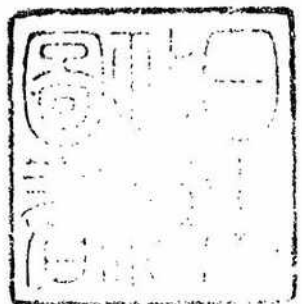


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

庫 交 閣 内			
南	一	番	和
架	間	號	書

滿蒙經濟事情

第十六號



東京府財政部

一、本書は當部滿蒙に關する産業調査上蒐集する資料を考查し周知を便し認むるものを逐次印刷するものとす。

一、本書は滿蒙事情精通者に頒つ爲めに非らず未だ該地方を詳かにせざる母國人に汎く經濟事情を紹介し堅實なる起業の指針たらしむるにあり。

一、順序は特に産業交通等の區分を設けず速知を要する事項より記載し且つ他日合本に便せん爲め事項の異なる毎に紙を改む。

一、本書の記事は成るべく普及を計るため新聞雜誌其の他の刊行物に轉載せらるゝを望む。

一、本書の材料は民政部員の實地踏査に係るものを主とし他官衙、學校、會社等の調査書類を參酌す而して編纂に就ては囑託旭藤市郎之れに當る。

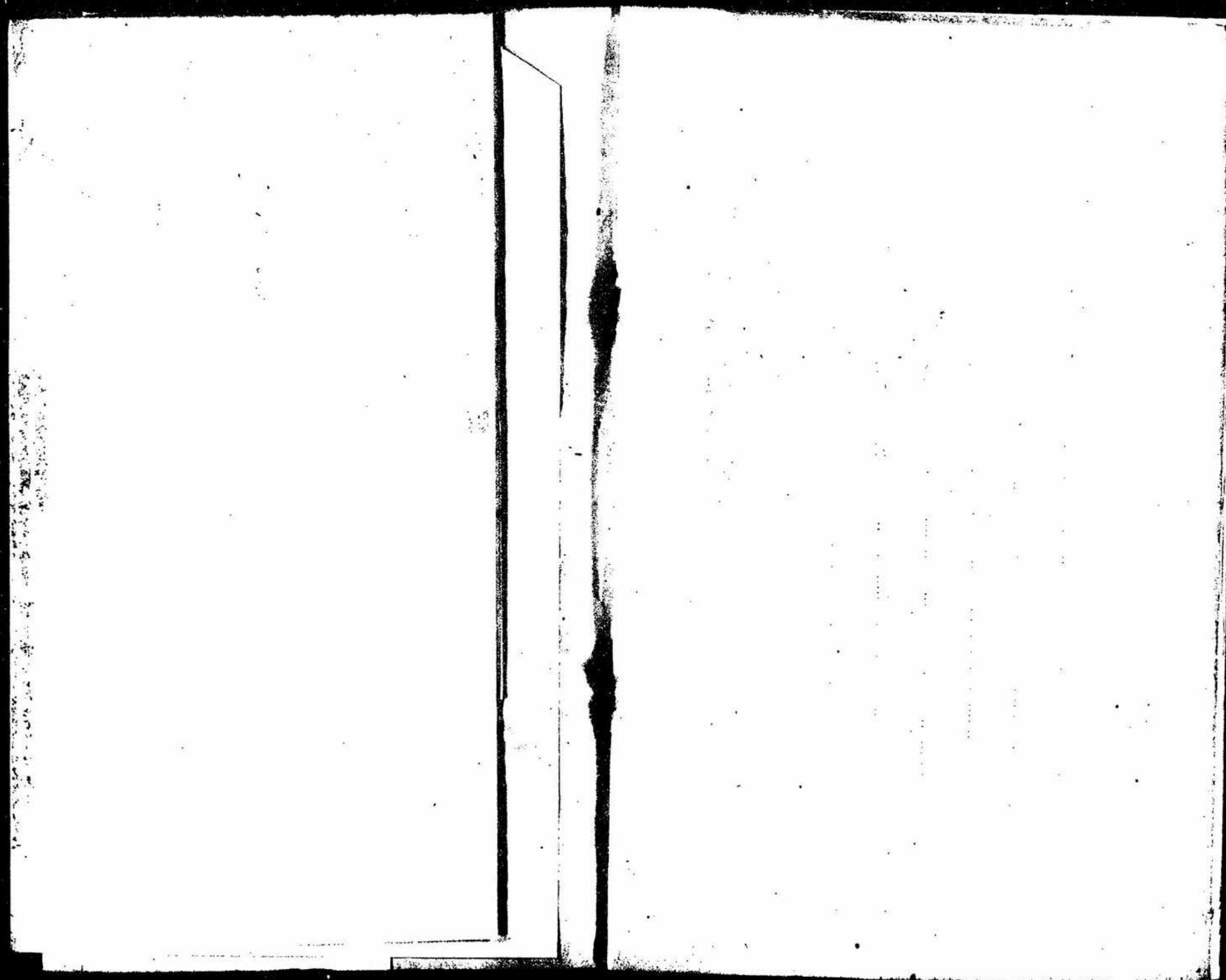
大正五年十月一日

關東都督府民政部

滿蒙經濟事情第十六號

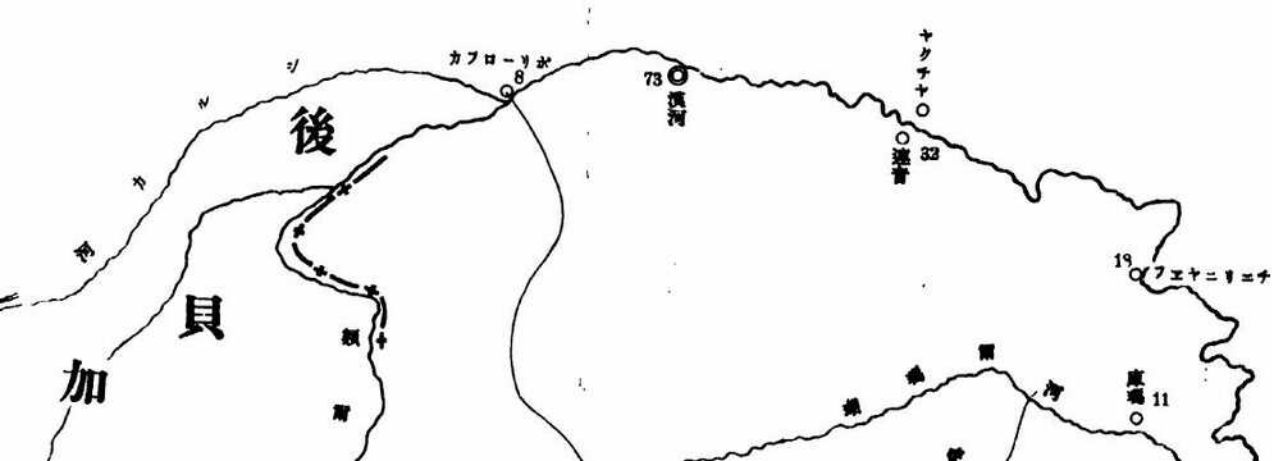
目次

一、純蒙古地帶調査旅行日誌	一
一、掏鹿海龍方面に於ける邦人發展狀況	九九
一、張家灣邦人發展狀況	一〇七
一、赤峰朝陽方面に於ける邦人發展狀況	一二三
一、林西經棚方面に於ける邦人發展狀況	一三一
一、滿洲に於ける諸工場	一四九

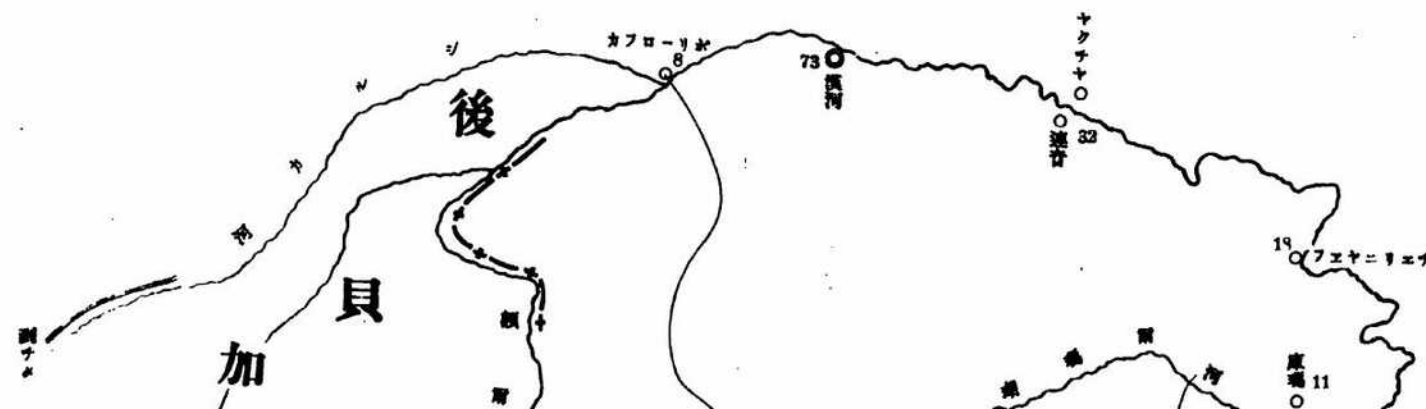


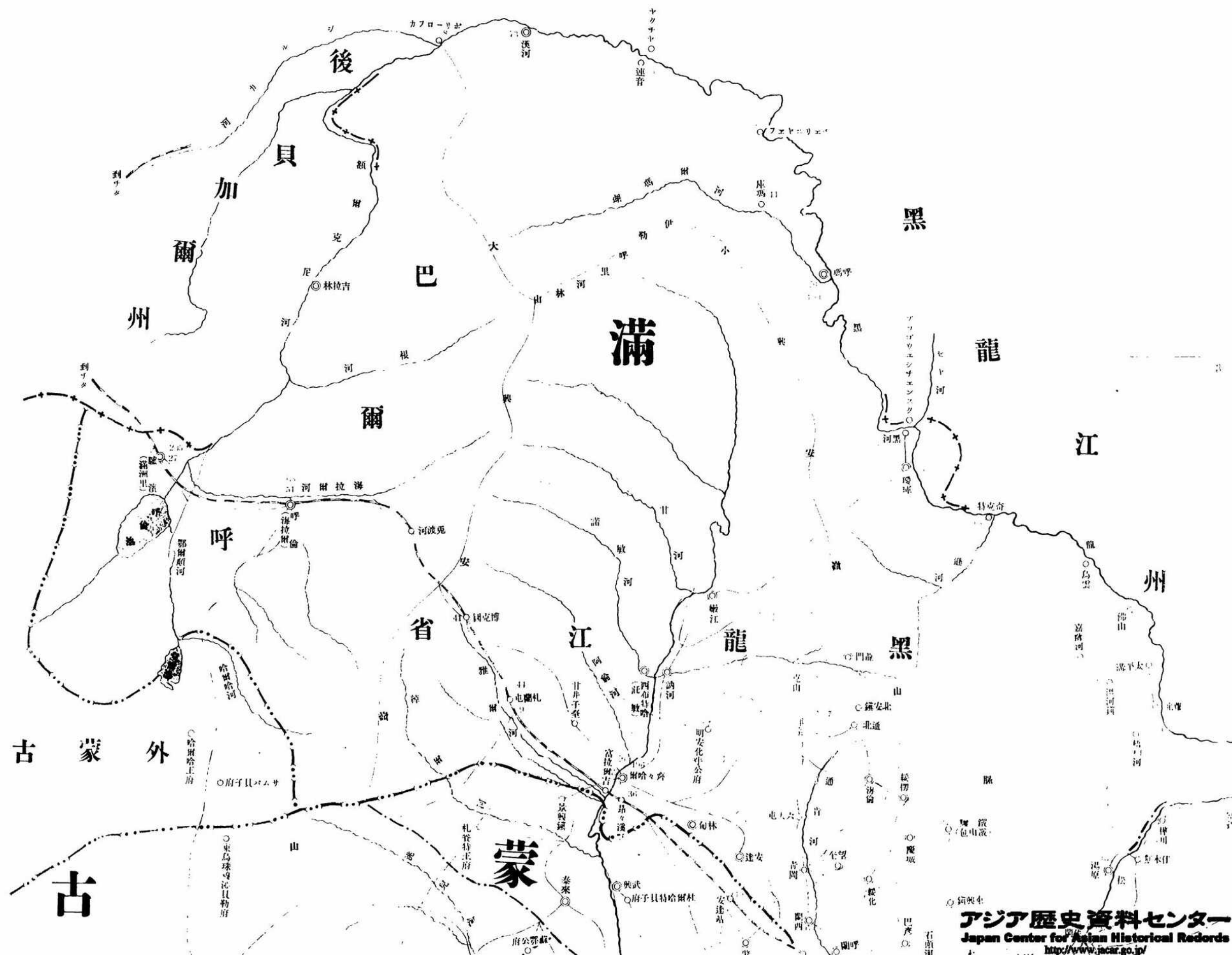


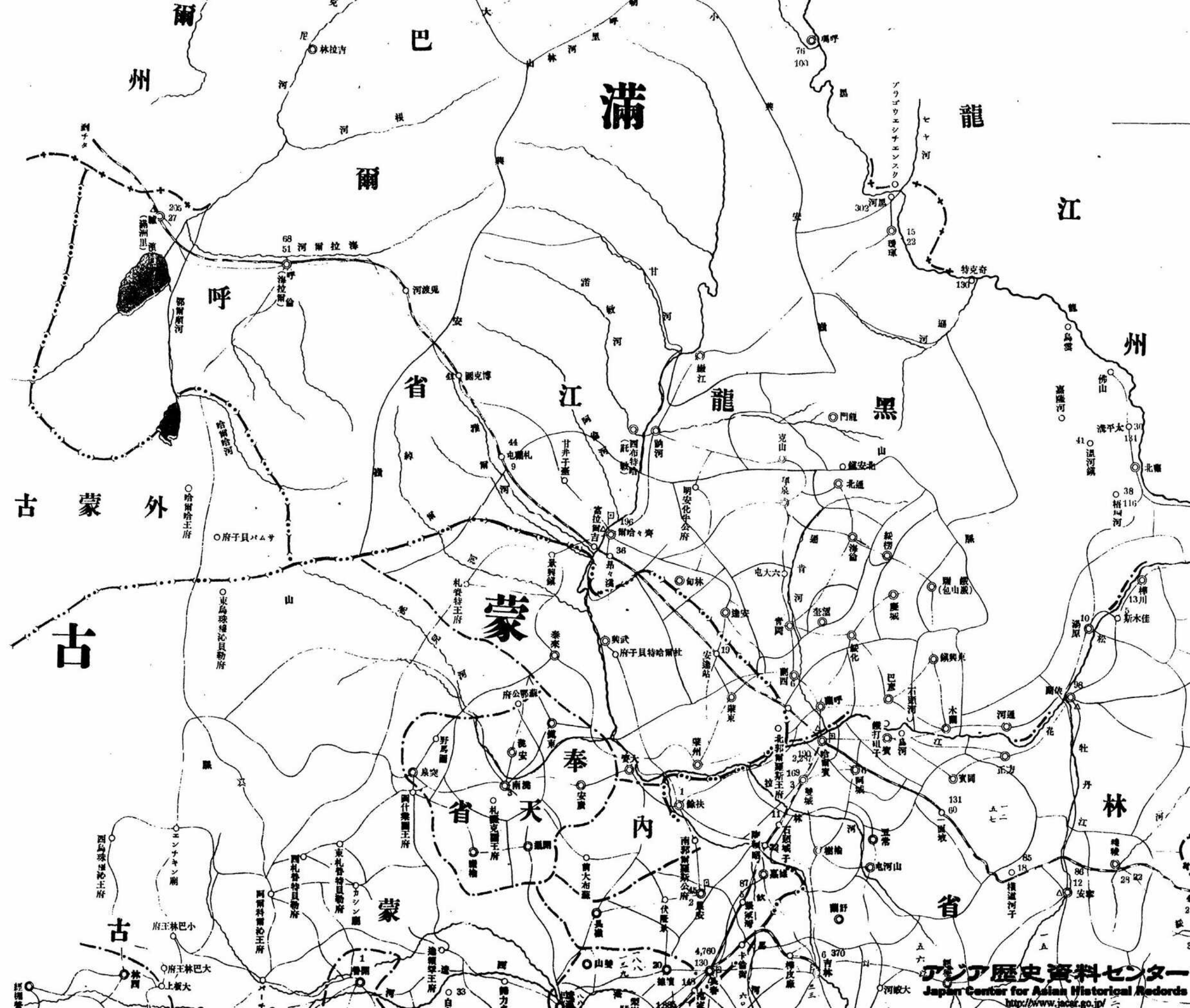
滿蒙ニ於ケル邦人發展圖



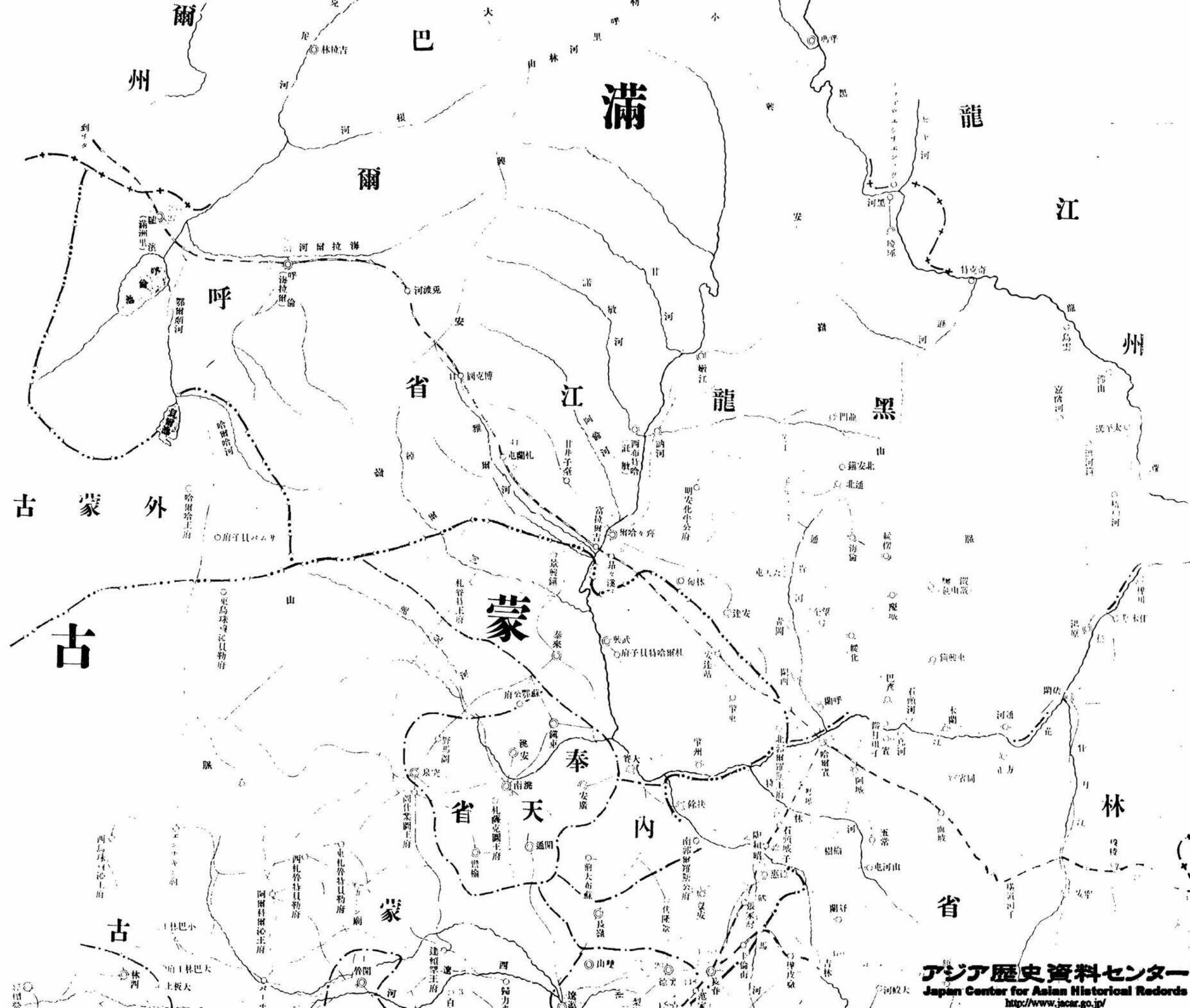
滿蒙ニ於ケル邦人發展圖



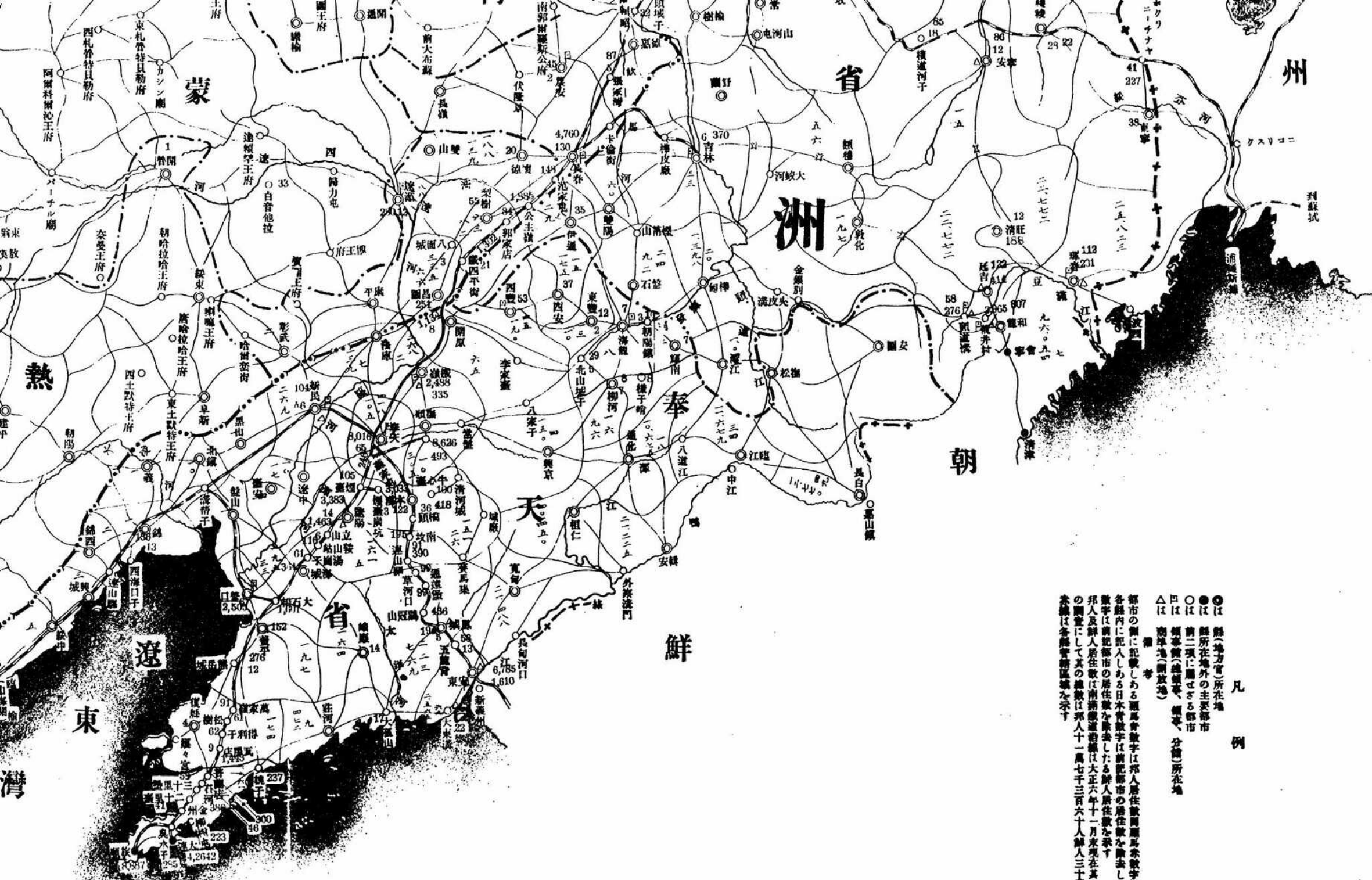




露光量違いにより重複撮影



露光量違いにより重複撮影



凡例

●は 縣(地方官)所在地
○は 縣所在地の主要都市
○は 前二項に属せざる都市
△は 領事館(領事)所在地
△は 商埠地(開放地)

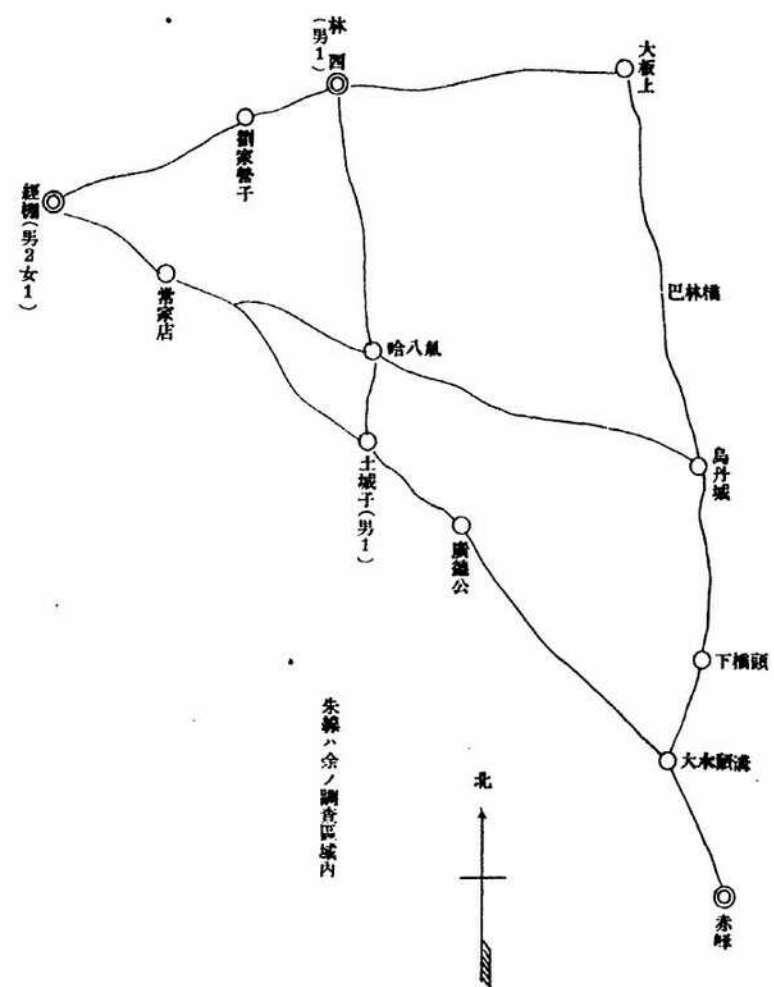
都市の側に記載する数字は邦人居住数、開闢地数字は邦人の居住数を示す
各縣内に記入する日本数字は前記都市の居住数を示す邦人居住数を示す
邦人及邦人居住数は前記都市の居住数を示す邦人居住数を示す
の調査にして其の總数は邦人十一萬七千三百六十八人、邦人三十三萬三千五百六十八人なり
素線は各縣管轄區域を示す



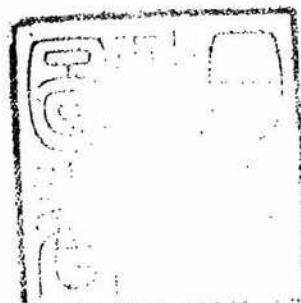
数字は前記都市の居住数を除きたる鮮人居住数を示す
邦人及韓人居住数は南滿洲鐵道沿線は大正六年十一月末現在其の他の地方は大正五年末現在の調査にして其の總数は邦人十一萬七千三百六十人鮮人三十萬三千五百十六人なり
赤線は各縣管轄區域を示す

裏面白紙

◎ 調查區域內邦人發展略圖 ◎



332
54689
60



純蒙古地帯調査旅行日誌

和五四六九號

大正 正 節記述

(一) 林西を發し大巴林王府大板上に到る

大正六年九月十一日 晴天西風強し 温度(平均)最高七十三度 最低四十五度
 今日現大巴林王府大板上迄の豫定にて本春旅行の節南道を通過せしを以て本回は北路
 を取る事とし午前七時駐在地林西城を出發し先づ東門を出で北方近くソブトン廟を眺め進
 行五支里にして五間房(戸數三支那人、家)を通過し小丘陵を越り東行十五支里にして黒山頭(戸
 數二支那人、家)尙五支里にしてボーリ(戸數二支那人、家)を通過す之迄の部落は全部支那人の
 居住せしものなりしも之れより東行すれば各主要地に若干の支那土著民或は行商人の小規
 模なる店舗を數ふるの外全然蒙人部落のみなりとす亦ボーリ溝附近に到る迄は路側に收
 穫中の蕎麥、蕎麥、谷子、糜子等の農作物を見たるも以東は純牧地帯と變じ其影を見ずボ
 ーリ溝を後にし猛烈なる西風に追はれチャガンムリシ河を渡り東走すること時餘にして

民國二年蒙匪討伐軍の兵火に罹りしカロラスタイ廟及喇嘛の住屋四十有餘が雨露に晒されたる慘狀を目撃し五十家子迄西北三十支里の地點に達し乗用せる馬車の轡轡を暫時放牧し余も亦休息中蒙古人が七臺の空牛車を曳て西行を認め何地に向ふかと問へば附近部落ハルステより林西迄買物に出掛ける途中なりと答ふ又林西より余を護衛し來れる支那騎兵は南北に連れる山岳を指し客秋巴布札布の軍が一時占領せし箇所なりと教ふ休息せる曠漠の草原には種々雑多の草繁茂し名を知れるもあり未だ曾て見し事すら無き珍らしきもあり其の知らざるは好奇心を動かし知れるは昔時跋渉せし母國の山野を追想せしむ。

更に東に向つて行を起しアンボングル(戸數七蒙古人、家畜牛八〇、馬三〇、羊五〇)を經北方山麓に小廟テウングルを見ボルコント梁を越え五支里にしてアルボルン(戸數六蒙古人家、畜牛五〇、馬一五、羊三〇)を經由し行程五支里の道中ボルボルジと稱する大梁を踏破し西大廟を過ぎ東走八支里現大巴林王府所在地大板上(蒙名イハバイシン)に到着せしは午後七時日既に落ちて淡雲老榆樹を罩め西天尙ほ紅を抹して西方チャガンムリン河を隔てイヲロの高峰天を摩するを望む

A、理想的の牧場

ボーリー溝アルボングル八十支里間茫々たる平原にして羊草茂盛しチャガンムリンの清流

亦此の平原を流れ且つ北に山を負ひ南に開け即ち水あり草ある理想的放牧場なるを以て到る處に畜群を見ざるなく余は此の地通過の際之を算したるに大約次の如し。

牛 一千餘頭 馬 一千二百餘頭 羊 二千有餘

B、トルウ

本日道中に於て幼牛の鼻柱に二股の自然木長さ一尺位のもの填込みをれるを實に奇體なりと感ぜしを以て其理由を隨行蒙古人に問ひたるに今年生れの牛兒に哺乳の不足を防がんため昨年生れの牛兒に對し母乳を飲む事能はざらしめんとて之を施すものにして之が草の味を知り得し時を見計ひ取り捨つ蒙語にて其名稱をトルウと云ふと答ふ。

C、翻々たる白旗

蒙古人居住の屋敷内竿頭高く白布に西藏文字の書かれたる旗の翻々たるを見る此の文字は俗人の依頼に應じ喇嘛の書き與へたる有難き經の文句にして總ての惡魔除けに之を用ふる由。(旗の文字は木版刷りのもの多し)

D、カツジン(村長)チーホー君よりの贈物

本日大板上到着後直ちに旗務公署を訪ひたるに目下農繁期のこととて全部自宅に歸り居る

この事なれば致し方なくカッシンを呼び寄せ滞在家屋の周旋等を依頼せしに先づ役員の不在を詫び即刻適當の家を世話し夜中再び余の旅舎を訪ひ麥粉五斤を贈り不自由の事あらば何事によらず申し出でられよと挨拶せる様支那化せる大板上附近には珍らしき事と感じたり余も返禮に若干の贈品をなす。

E、家畜番

放牧せられある家畜の番人をヘルチン(羊)マルチン(牛)アドチン(馬)の三種とす然して一人にて之等を監視なし得る最大限は羊三百、牛二百、馬三百頭を普通とし單獨放牧には自家の使用人を共同放牧には組合の内より順番を定め各交代に監視人を出す今日撃せし馬群監視の状態を逃せんに監視人は騎馬にて長桿子(蒙名ツルハ)を携へ遠く馬群の周圍を警戒し或は道路を遮りて前進方向を變換せしめ或は群中に馬を乗り入れ之を展開せしめ亦は兩翼を壓迫して集團を作らしむる等草地の状況又は給水の必要に應じ意圖の如く畜群を操縦指揮する事頗る巧妙を極め恰も自己の手足を動かすが如し。

F、通過の道路

林西東門外の一小丘陵及ボルコント、ボルボルジの二嶺を越ゆるの外頗る平坦なる道路な

り詳細は林西事情参照あり度し。

余は腸工合悪く氣分勝れざれば日記を記し終り午後十時就床夜中腹痛後下痢二回。

九月十二日 晴天 温度最高七十八度 最低四十度

大板上滞在 林西出發一兩日前より胃腸に故障を感じをりしも格別の苦痛を覺わざると當地にて落合ふ可き約束の赤峰在住熊本縣東亞通商協會留學生井上、本多兩君が十日或は十一日迄には當地に到着する筈なれば稍々無理をなし驅けつけたるに未だ其の影をだに見る事能はず。

本多一行は恐らく烏丹城にて牛車の雇入に困り遅れたるなる可し如何となれば同地附近の牛車は目下殆ど全部タムスノールに採鹽に出掛け居る筈なればなり。

相當分量の携帶藥を服用し終日臥床す稍々熱あり小便茶色を呈す。

九月十三日 晴天 温度最高七十四度 最低四十度

大板上滞在、昨日より新鮮なる牛乳と村田技師より教はりたるデルマトール及重炭酸曹達を服用するのみ終日臥床。

本多、井上一行未だ來らず余は昨年及び本年に於ける純蒙古地帯旅行の経験により長期旅行

には食料品携帯の絶對的必要なるを知りたれば夫れが携行を本多一行に堅く依頼しおきたるに其の一行未だ到着せず。待たすとも待つ身になるなと昔の者は甘いことを言つたものなり。

九月十四日 曇天 温度最高六十八度 最低三十度

大板上滞在 午前二時雷雨沛然として來るも須臾にして止む、終日病臥。

九月十五日 晴天 温度最高七十度 最低四十一度

大板上滞在 午前林西米司令官より當大巴林旗務公署に對し數千名よりなれる一團の蒙匪東扎魯特旗ボルシンスムに出現し一千餘頭の馬を掠奪し去れりとの報告に接せしを以て同團何時當方面に來襲するやも計り難ければ細心警戒を要すとの傳達ありたりと聞く。終日病臥、午後巴林右旗頭等臺吉協理鮑文寶氏來訪せらる。

九月十六日 晴天 温度最高七十二度 最低四十二度

大板上滞在 余は本月初めて牛乳以外若干の鹽煮したる馬鈴薯を食す午前午後二回氣持よき便通あり氣分好ければ午後旅舎の南方に位する草原を往復三支里徐々として歩行せしも大に疲勞を感ず而して數日の病氣に體軀槁然肉落ち骨出で居るも幸に病魔漸次衰退の兆あ

るが如し。

午後五時英上常統領配下に屬するムーシーシャ駐屯馬隊李二十八營長部下營(二百五十騎)を引率し東行の途當地に來り各民戸に分宿す其の兵士より聞く處によれば常統領も本日北路を取り東行蒙匪討伐のため出陣せりと稱す。

此の爲在板支那商は荷造をなし何時にても引上げ得る準備をなし戰々として業に安せず一般人心亦恟々所謂山雨到らんとして風堂に滿てるの概あり。

九月十七日 曇天 温度最高七十度 最低四十八度

大板上滞在 味爽暗々たる群犬の長鳴嗚々たる馬蹄の音愁眠の枕に落つ之れ昨夕來板せし二十八營の馬隊が先途を急ぎ曉起し東行して蒙匪討伐に向ふものなり然るに此隊僅かに若干の豫備彈丸を携帯せるのみにて各員一銃一馬、著のみ著の儘なり如斯狀態なれば結局憐む可きは之により常に被害者となる無事の蒙民なりと雖も亦諷て考ふるに支那兵士の強奪無理からぬ點あり如何となれば若し彼等にして掠奪を行はざれば携帯食料なく豫備被服なき彼等は遂に餓死か凍死の外取るべき途なければなり。

要之頗る不完全なる軍隊組織を根本より改良するにあらざれば支那兵の掠奪は遂に永久止

む事なかるべく畢竟掠奪は兵卒の罪にあらず軍界主腦者の責に歸すべきなり試みに軍界主要の地位にある者を物色吟味せよ彼等の總ては各巨萬の財を積み祖袍に身を安んじつゝあるにあらずや而して此の富は或意味に於て掠奪により間接收得せしものと解釋するも敢て不當ならざるは余の斷言して毫も憚らざる處なり。

願くば支那當局者此處に鑑み速に軍隊組織の改良を計られんことを切望す。

余は病氣殆ど快復せしが如きを以て明日當地を發し旅行用食料品の一式を赤峰に整へ單獨北方旅行を決行せんと朝食後支那商を訪ひ本春調査せしものと比較對照の調査を遂げ尙蒙古人よりも各種調査の材料を集め午後二時半休息のため南方イッロ山麓平原に出づれば當地目がけ馳せつけ來る騎馬者の影數箇を認む暫時にして接近すれば之れ待ちに待ちたる井上、本多兩君と之れを護衛の支那兵なり初めは無言の握手次第で相互の無事を慶し自他共に滿身歡喜の情に充たさる。

夜中旅行計畫に就て協議を遂げ明後即ち十九日當地發先づ東北行小巴林王府を見舞はんと決す。

當地にて調査したる當地方狀況を左に略記す。

△、大板上の近況

大板上の概況に就ては今春同地通過の際調査したるもの滿蒙調査復命書第八附録自赤峰至白音他拉沿道の記事中に記載せるを以て其の重複を避け其の後に於ける變化及び調査漏れに就てのみ此處に記する事としたれば詳細につきては既記復命書と併せ參照ありたし。

(イ) 支那商舖の開業と廢業

林西より東大板上に來り本年陰曆六月十二日新規開業せる支那雜貨舖あり屋號を萬泰恆と稱し主人を邱宗山と云ひ赤峰縣人たり亦一昨年以來當地に於て引續き營業し居たる福巨號は本年七月赤峰より商品輸入の途島丹城を北に去る二十五支里千溝子附近に於て二百兩餘に價する貨物を馬賊に掠奪せられたる外種々の事情により來る陰曆八月十五日仲秋節を期とし引上げ歸峰する事に決し目下閉店に關する諸準備中なり。

(ロ) 現今の物價

品	目	單位	價 格 (大正六年三月七日調査)	價 格 (大正六年九月十七日調査)
白	麵	斤	銅元 八	銅元 十
燒	酒	同	三十二枚	二十八枚

葉煙	麻草	白油	紅糖	白糖	洋火	大洋	中布	磚布	洋蠟	煤油	香油	粉子	鹽	鼻	大	紅
一斤	一斤	一斤	一斤	一斤	一包	一包	一疋	一疋	六本	一斤	一斤	一斤	一斤	一斤	一斤	一斤
銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元
四十枚	二十八枚	六十枚	六十枚	四十枚	十二枚	十二枚	五錢	五錢	二錢	八分	八分	八分	八分	八分	八分	八分
銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元	銅元
四十枚	二十八枚	六十枚	六十枚	四十枚	十二枚	十二枚	五錢	五錢	二錢	八分	八分	八分	八分	八分	八分	八分

備考 右記數量に至りては秤目、樽目に就き不正手段をとり換酒等には多量の水を混入する等悪人を警告する支那の通例たるが如し、商品は品質の善良なるより價格の安値なるもの實行よし。

(ハ) 商取引

現金賣上(即時物々交易も之に含む) 六分 掛 賣 四分
但し掛賣に對しては既述價格の二割高に販賣す。
現金にて支拂をなすもの 四分 品物にて代價を支拂ふ者 六分
獸毛、皮にて代價を受取る場合は赤峰皮店の時價表により之に毎斤銅元二枚の割にて運賃を掛け引取る家畜に就きては適宜相互の協議による。

B、農 事

農作物は糜子七分、蕎麥一分五厘、谷子一分、雜穀五厘の割合にして本年の出來高五分作
農産品は陰曆五、六、七月の候最も高價にして九、十月の候最も廉價なりと現時の相場銀
一兩にて糜子、谷子、蕎麥各二斗半。(公量斗)

C、大巴林旗内の富豪(即ち多數の家畜を所有せるもの)

部落名	人	部落名	人
ホトロス	トンゴロワンシル	ホシホロ	スラーチエト
セーラム	トーチン	ハスタイゴロ	ボホートクトフー
コロラスタイ	ハーブンガー	モゴト	メーシーチヨクト
コロラスタイ	ヌモクチー	ネーモンソム	ネーダン
ボロス	コンボーチャバ		タバカルブ

D、大巴林旗内大部落名

部落名	距離	部落名	距離
ゴゴンシヨロン	大板上よりの方向	ボムト	大板上よりの方向
アフエスーム	東南	エシルト	北
コロコロタイ	南	チャギーラソ	北
タルバイシン	東	ホトロス	西北
	五支里		二十支里

E、支那化せる大板上

從來蒙古風を存しをるを以て有名なりし大巴林も支那勢力の侵入するに従ひ其風俗を一

變し吾人をして蒙地たるか否かを疑はしむる點多く蒙人の過半は支那語を喋り家屋は其の殆ど全部が純支那式の建築にして純蒙の地帯に見る能はざる豚、雞を飼養し門柱の前面或は壁間等には之も支那的の諸事隨心大吉大利、台頭見喜、財地春生萬倍金等の文句を書きたる紅紙を貼りたるあり如斯致々として蒙人が範を支那に取らんとせるの狀態なれば近き將來に於ては必ず同旗内に全々支那化するに至る可し。

F、美人と獸糞

現今繁農期にして男子は農作物或は冬期用羊草の牧獲に寸暇なきを以て婦女子も之が手傳に或は留守居、炊事に従ふの餘閑に燃料の各種獸糞の燃や悪き形になりざるもの或は其の粉末となり居るものを混交し水を加へ柔かくなるを待ち機手を以て扁平形の糞饅頭を造りつゝあるを見る。

G、露西亞人の牛買

本年陰曆六月十三日露西亞人三名(内ジョナット及びメシーと稱する二名はベレット人)二名の蒙古語に通ぜる支那人通譯を伴ひ哈爾濱方面より來り大板街南方に流れるチャガナムリン河北岸に天幕生活をなし露國軍用牛の買入に従事し僅に三百餘頭を買込み同月二十四

日奉天方面に向ふと稱し立ち去れり而して彼等は是非共一萬頭を買集めざる可からずと謂ひ居れりと亦購入牛每頭大洋半元の税金を課せられ押問答の末遂に大洋票(交通銀行紙幣)を以て全部納税を済し立つ鳥の跡を濁さとりしと云ふ。但し牛の代金は碎銀子を以て支拂ひをれり。

H、暗さを白きに出さぬ蒙人の迷信

當地附近蒙古人は日暮れに至れば白色の食物を家より外に出す事を忌むの迷信あれば日没後は決して鹽、牛乳、糧食、乳製品(蒙人は之をチャカンバタと云ふ即ち白き糧の意なる由)の交易或は貸與等を行ふ事なし。

九月十八日 午前降雨午後晴 温度最高六十八度 最低四十五度

午前中報告記述、午後旅務公署を訪ひ韓、金兩協理に面會し滯板中の厚志を謝すると共に種々調査する處あり歸途修繕及増築中の東大廟を見る夜中出發準備、牛車雇入れの談判を済し午後十時就床。

(二) 大板上より小巴林貝子府に到る

九月十九日 晴天午後強北風 温度最高六十八度 最低四十四度

午前六時起床街上四、五騎支那毅軍馬隊の兵を見る之れ經棚縣下土城子駐屯楊營官の一營が蒙匪討伐のため東行の途宿泊すべき宿割りのため先發し來れるものなり。

午前七時十五分大板上出發東行大巴林王府前を通ぎ北に折れ直ちに平野に出づ之より東北行平坦なる草原を通ぎ或は大波狀地を縫うて進む苅り取られたる野積の糜子の附近には鳥群がり澄み渡れる秋天には低く多數のダラホーラ鳥(雲雀の稍大なるもの)舞ひ高く三々伍伍雁が連り飛ぶ地上には雜草の間淋びしく咲ける淡紫色の野菊に餘命長からざる黃蝶、草刈りの農民、放牧の牛二百、羊三百、馬百餘等を目撃しつゝ三十五支里にして北方ヲゴロチツク山を負へるホムト(戸數三十)のウルハチン君の許に到り朝食す同君の客室には皆て此の方面に來遊せし田代皖一郎、高島一雄、山本瀧四郎、現赤峰縣知事葉大匡氏等の名刺壁に貼りつけありたるを見たり同部落は半農半牧に従事するも農産の收量一村を養ふに足らず不足の若干は他より之を輸入すと亦飼養家畜は馬百、牛二百、羊五百有餘疋にしてタラカ(部落長名)をチーシンサンと稱し余等一行の小憩せしウルハチン君の父は生前大巴林旗章京協理を勤めをりし人なる由。

午後一時半發七支里コロコテン河(バインタラ河とも稱す)を渡りバインタラ(土庫五、包五馬八〇〇)を經由し更に東北二十八支里にして午後五時ウイルデウ(土庫一六、包四、都魯、ナレマン羊二〇〇)に著し宿泊す當地附近各戸鶏、豚を飼養し稍支那語に通ずる者少なからず。

A、道路及地形

本日通過の道路は極めて良好にして行進實に容易なり地形は所謂コロコテンの平原に數箇の傾斜緩慢なる丘陵連なり路側左右共に僅少の不完全なる農耕地を見る。

B、大巴林王府所領の榆樹林

バインタラを東に去る五支里バインボトと稱する地に數百本の老榆樹を見る之れ大巴林王の所有に屬するものにして同部落民之が監視に任じをれり。

C、大巴林王の歸期

數年前より北京に到り種々なる事情により己れの所領地に歸來するを得ず旗内の政務萬端舉て協理に任せ居たる大巴林王の歸期を問ふに韓章京答て曰く本年陰曆六月東大廟會迄には歸巴の筈なりしも亦々延引せしを以て一箇月前人を北京に派し其の歸期に就て確かめつゝあるを以て同使者歸り來れば確實なる事分明す可く自分の推定によれば多分陰曆九月

下旬或は十月上旬の候ならん。

D、大巴林旗の兵制

旗民各戸より六代目毎に一名の青壯年を義務兵役に服せしめ服役年限十五年にして最初は自家所有に係る乘馬を使用せしむるも六年目毎に王府より兵卒一名に一頭宛の乘馬を支給し其の給料は一箇年糜子五石、被服は王府より支給す然して一年一度の休暇を與ふるも最大限十日間の規定にして平常私用にて外出なし得るは四日目に一回の順番にて若し無斷外出する事あらんか刑罰として臀部を牛皮製大形の鞭にて強く十度び打つと云ふ。

E、腹痛の妙藥

本日余を大板上より護送し來れる二名の蒙古兵中一名のトモノウルジ君ウイルデウ投宿後余の給仕を通じ腹痛耐へ難ければ少量の焼酒を要求し大茶碗を持ち來りしを以て余は腹痛なれば幸に良藥の持合せあり焼酒は反て害あるを諭せしに良藥よりも焼酒をこの要求を改めざれば意に従ひ之を與へたる後給仕をして吾人に對し淺薄至極の掛引は降後無用の事亦明日夕刻には必ず腹痛あらんも幸に汝等の良藥とせし焼酒は多量に携帯なしをれば安心せよと皮肉り置きたり蒙古人の狼智慈概ね斯の如し。

九月二十日 晴天午後より西北風強し 温度最高七十度 最低四十三度
午前七時三十分ウイルデウを出發し東北に向つて平坦なる道路を進む四支里上ウイルデウ
(蒙古人二五、馬五〇)を過ぎコロコラン河を渡る此の渡河點は大山巴林兩旗の旗界なり更に
之れより數支里路傍放牧の家畜或は蒙古人が燧石に使用するラルブス草を雜草中に見つゝ
進行するに支那毅軍馬隊の兵士一名牛車上に横臥せる支那兵を護り西南下せるに逢ひたる
を以て何地に向ふやと問ひしに今般征蒙匪軍に投じチンシバー廟迄行きし處車上の同僚病
氣に罹り吐血後非常の衰弱なるを以て駐屯地東河(林西の東北五十支里)迄後送の途中なり
自分等の統領常德盛閣下は先日五營の騎兵を引率し既に阿魯科爾沁を經由し騷亂地東扎魯
特に到着せられし頃なりと語れり之に別れ車行稍困難を感ずる一箇所の地隙を過ぎ勾配頗
る緩やかなる大梁を越へ直ちに北に曲り今日の出發地點より總行程四十支里午前十時四十
五分小巴林王府に著しチエリチ喇嘛タンバチャムサ君の許に投宿す當王府は戸四十(二
三の土造家屋を除き他は總て蒙古包)王府の西南に位するワンエ廟は僧房二十餘(全都土
亦は煉瓦造)喇嘛百名を有し堂々たる煉瓦建ての王府は後方即ち西北にはセリトブス山
の秀峰を負ひ前面東北より西南に開ける平原中にコロコラン河の清流を眺め頗る景勝の地を

占む現王は名を色丹那木扎勒旺寶と云ひ鎮山と號し扎薩克郡王たり本日見聞せし斷片的事
情を記載すれば

A、品物より金を好む

昨夜投宿せし宿の主人に對し謝禮にもと若干の物品を贈りたるに彼れ曰く其の御芳志あれ
ば何卒品物だけの價格を現金にてと遠慮氣味に申し出でたり之により前日來之れと同様の
場合に於て贈品をなせし時彼等の模様一伍一什を追想するに物品より現金を好むと頷かる
る節多し之れ支那化の結果ならんか。

B、極めて清潔なりし喇嘛僧の宅

一般に喇嘛の住める家屋は内外共に不潔ならず特に余等一行の泊りしタンバチャムサ君の
内は家屋内外の掃除行き届き前庭には煉瓦の破片にて仕切れる花園には萬歲菊、撫子を順
序よく植ゑ隣家の庭中亦老いたる落葉樹を眺め之迄の途中に曾て接せざる清潔の光景に接
したり。

C、在住の支那商及び物價

劉、王、李の三舖あり共に天幕生活をなし全部烏丹城より來巴せしもの李は十四、五年以

前より引續き營業せるものにて今同人より聞取りたる所によれば取引は殆ど物々交換にして掛買り多く其の使用せる尺は一尺日本曲尺の九寸二分に相當し一斤と稱するは烏丹城の十四兩に當る(二兩少なき譯なり)主なる交易品は牛、馬、羊皮及び狐皮(陰曆九月頃に多し)狼皮(陰曆十月以降に多し)等にして牛皮は普通大のものにて一枚銀四兩、馬皮二兩半、羊皮六錢位の見當にて受取りをれりと將來も陰曆九月初日より十日間は、ワシエ廟の祭りを以て其の際大いに商はんといふより支度を整へ待ち焦れをれり。

物價表 (現金買價格掛買に對しては二割高)

品目	單位	價格	品目	單位	價格
白麵	二十斤	銀一兩	磚茶	小形一箇	銀四錢
燒酒	五斤	一兩	紅砂糖	一斤	同四錢
葉草	一(把二斤)	一錢二分	冰糖	同	同二錢
茶	一斤	三錢	水砂糖	同	同四錢
油	一(包十箇入)	同	月餅	同	同
洋麵	一斤	同	粉條	同	同
麻	一斤	二錢	子	同	同

D、小巴林旗内の喇嘛廟

名稱	僧數	名	僧數
ワンズ	一〇〇	ヘレゲン	四〇
チヨンデン	一〇〇	ブレン	一〇〇
ガンガン	一〇〇	デメン	一五〇
ウノテイ	同	アル	三〇
テブン	同	ブル	四〇
ソボロガン	同	ヤメ	六〇
アフエト	同	ン	六〇
	同	ベ	六〇
	同	ン	六〇

備考 右記方向は其の大略を示せるに過ぎず例へば西北に記せるも西に偏せるあり或は北に寄れるものあり亦里程も蒙古人に就て調査せしものなれば其の大略と知られたし。

E、タムス鹽運搬の牛車と逢ふ

王府十五支里前の地點に於てウイルデウ(昨夜宿泊せし部落)の住民が自家用の殘餘糧食と交換するの目的を以て西烏珠穆沁タムス鹽湖より採鹽し南下せる牛車六十臺に逢ふ今彼等の語る處によれば往復日數二十二日を費し採鹽地に於て牛車各一臺に對し銀五錢(?)の税金を支拂ひたりと亦此の一行に後れる事二支里にして更に六十七臺の運鹽牛車を見しも余

等は左道を進み彼等右路を行きたれば其の何地に向ふやを聞く事能はざりき。

F、注意を要する事

小巴林に於ては必ず東巴林又は巴旗左旗と呼稱するを可なりとす然らずして之れを小巴林と云はんか吾人が外國人より小日本と呼ばれし時に於けるが如き不快の感を抱かれ思はざる損をなす事あるべし。

G、滑稽なりし病氣診察

滯在中皆て日本人の旅行者により施藥又は治療を受けし經驗ある蒙古人等其の卓效を知りしにや數人の病者余に藥を求めしを以て各適當の藥品を施したるが就中最後に來りし一人は息子今年五歳に達せしも未だ一語だに言葉を發する事を得ず何卒言葉の出る様になる良藥をと醫者の治療を乞ひしには我國維新當時の浦賀黒船或はバレン問題を追想し思はず大笑したり。

(三) 小巴林貝子府より阿魯科爾沁に向ふ

九月二十一日 晴天 温度最高七十一度 最低四十二度

午前七時小巴林王府出發東南行三支里にして渡狀地帯に入り東行十七支里にして右方巨岩磊砢として勢ひ飛ばんとする中秋草恰も毛氈を敷けるが如きモスタ山南麓ベーシン廟を見更に東北に向ひ三十支里狐狸住む草原を走りつゝ東南方微渺として雲間に連る奇峰を望む遠きは紫近きは緑を呈し其間所々に純砂地帯ありて家畜の放牧せられある等の大バノラマ中の人となり午前十一時セルホトエロ(包七、牛六)シヨワスタイ君の包に著し朝食を喫す同地附近糜子、蕎麥の小量を耕作し豐作の時は自家用に充つるに足るも今年は早魃の結果不作にして漸く三箇月分の食糧に足る可しと包内營口關東柴火公司(支那人經營)製造進歩印洋火を見る之支那行商人より一包制錢百枚にて求めしものなる由午後二時十五分セルホトエロを後にし先づ二小流を渡り二十支里を進み東に流るゝヲランウルグ河を渡り更に平坦なる良道を行くこと十支里ヲランウルグエル(包一、牛一五)を通過し五支里にしてハトンバ(包二、牛三〇)を經東北五支里ソフイン廟(別名ラミン廟僧房四〇、僧一五〇、佛爺喇嘛ハムガガン)に著せしは午後六時なりき。

A、感心な事と不感心な事

朝食の際休息したるシヨハスタ君の子供三名に携帯し居たる氷砂糖一と握り宛を與へた

るに各自土座に跪き三度び頭を下げて謝意を表したるには目頃の仕付もさこそと感心なしたるも彼等親子が食事する様を見しに其の食ひ終るや恰も猫の如く碗を舌にてペロ〜と甜め平然たるには如何に習慣とは云ひながら其の無作法なるに驚きたり之れ或は糧食の常に豊富ならざる結果の現象乎。

B、廟會を見る

十九、二十、二十一日は當ソソフイン廟に廟會ありしが余は其の最終日然かも將に祭事終らんとせる際に到着せり次に余が見たる儘の祭の有様を記述せんに蒙人等が生佛とせる佛爺喇嘛の有難き説教終了するや各遠近部落より參詣に來たれる數百千の善男善女は頭を垂れ各自順次に佛爺喇嘛の前に到れば同喇嘛は蒙名シフルと稱する長さ一尺四五寸の木棒の端に絹織物製袋様のものを下げたるものにて一々其の頭を押さゆ其の際多くの信者は若干の喜捨をなす様我國眞宗のヲゴゾリ(俗稱)に似たり此の式終れば佛爺喇嘛は普通喇嘛の擔つぎ議れる與に乘り喇嘛の奏する佛樂に送られ生き佛として路傍に待ち受け居る信者連に拜がまれつゝ住宅に歸れば會も終り盛裝せる參詣の喇嘛、俗人の四散する様一陣の秋風來つて紅葉の飛散するが如し亦遠方よりの參詣人は天幕、食料品の一式を持ち來り三日間、

の廟會中露營生活をなせしもの少からず。

C、新築中の廟

現在の廟東側に近く支那職工、人夫(請負人烏丹城人)を使役し西藏式石造一大廟建築中なるが目下六分出來上り餘は來春解氷を待ち工事を續行すと稱し居れり。

二十二日 半晴半曇 温度最高七十二度 最低四十度

午前七時四十五分南方ヲラングル河の清流を隔てテヨゲン山の蜿蜒たるを眺め北方バイ山の朝爽を負ひ風景明媚なるソソフイン廟を發し東南行五支里トロモトエロ(包三〇、牛一〇)更に行く事十五支里バインコロエロ(包一、牛六〇、羊二〇、赤峰)を過ぎ東南行、平地、地隙丘陵、山岳を越わ十支里にして高麗城子南面に位する山頂に建てる塔下に達す此の塔は黒煉瓦を積みて造られ高さ大約二十五間七段より成り周圍十六間八角形にして各面石に彫刻せる佛像、天人、四天王等の像を飾りつけ多年風雨に晒され多少破損の箇所あるも尙よく昔日の影を止め構造頗る巧妙なり南面入口あるを以て其の内部を窺ふに唯漏斗を逆にしたるが如き上部に鳥の巢を見るの外何等得ることなく山を降り北に向ふ空腹を感ぜしにより蒙古包に到り牛乳を啜り亦北進を續け蒙古人の所謂青城(ゴロトキン)即ち高麗城の古跡に著す同城は遠の

上京にして現今尙當時の柱石、煉瓦、青色瓦、普通瓦、陶器等の破片城跡の内外各所に散亂し東南隅には高さ十五尺餘の石佛あり北に連れる丘陵上ビーン廟と並行して南塔より稍小なる古塔聳立し盛大なりし昔時の名残を止む其の土にて造られし城壁は今尙存在し一面我が約九町位の方城にして四方山を以て圍まれ西より來りて城の南壁に接近し流るゝバイン河及西北より來りて北壁に沿ひ流るゝチャガンツン河は城の東に於て合しウルテムレン河となり遠くチガステハール湖に入ると云ふ此の附近海拔六百メートルの高地なり。遼亡びて既に七百有餘年山河依然たるも破壁寂寥として徒に古への面影を偲ばしめ俯して秋草に向へば悲風千里より來りウルテムレン河空しく流るゝのみ。

A、蒙古人の商人

ビーン廟僧舍南端に天幕生活をなし近郷の蒙古人を相手に雜貨を商ひ居る二組の蒙古商人あり甲をトムルバカン(漢名を李と稱す)と云ひ喀喇沁旗人にして蒙古人一名、支那人二名を使用し乙はルーシーと稱し蘇鄂公旗人にして一名の同旗人を使用しをれり共に數年來當ビーン廟に於て商業に従事し本年は陰曆二月の候來り開舖せしと云ふ今同人等の語る

處によれば

現金賣物價表 (物價即時交換も之と同價なり)

品目	單位	價目	摘	要
白麵	一 斤	銅元 四十枚	賣行よし	
燒粉	一 條	四十枚	賣行最もし	
磚子	一 包(十箇入)	三十六枚	賣行よし	
洋茶	一 包(十箇入)	十六枚	日本製雙美人牌	
葉煙	一 把(六兩)	二十枚	賣行よし	
紅糖	一 斤	百六十枚	大葉香片	
白糖	同	四十枚		
冰糖	同	六十枚		
水花	同	八十枚		
棉煙	同	二百枚		
鼻餅	同	百六十枚	喇嘛用(主として)	
月餅	同	三十二枚	菓子(支那人向には香油を調味料として)	
芙蓉	同	四十枚	菓子(支那人向には香油を調味料として)	

純蒙古地帯調査旅行日誌

粉	斤	銅元十六枚
油	同	三十六枚

備考 商品は赤峰より隨時仕入れなして赤峰に於ける十四兩を以て一斤と計算せり、而して其の取引は掛費五分、現金費二分、物品と即時交易するもの三分の割合にして、通貨は碎銀子最も多く其の他赤峰、林西方面に使用するものと同様にして交通銀行票一元は銀六分と換算しなれり、掛費は右表の二割高を以て商ふ、支拂期は一定せる規約なく一時閉業引上をなす場合に於て多く之が同收をなす。(當期には林西より來れる常文生と云ふ支那行商人も居住す)

B、獸皮獸毛の相場

交易の際に於て商人が蒙古人顧客より受取る獸皮、毛の相場は大約次の如し。

羊皮(山、綿羊大差なし)普通大	一枚	銅元八十枚
牛皮	十三四斤位のものにて一枚	銅元九百枚
馬皮	普通大一枚	銅元四百枚
羊毛	每一斤	銅元六十枚

C、蒙古行商(出撥子)に關し邦人に對する希望

蒙古内地に於て邦人が小資本を以て著手することを得且つ最も有利なる商業としては吾人

は雜貨行商を以て第一に指を屈するを憚らず如何となれば現在此の業に従事し居る支那人及全然支那化する僅少の蒙古人(喀喇沁旗人多し)は蒙古人の無智蒙昧なるに乘じ其の狡猾なる本性を現はし、1. 掛賣の記帳を瞞著し、2. 賣買共に樹、秤の量目を誤魔化し、3. 粗惡なる物貨を法外の高價に賣り付け、4. 掛賣に對しては二、三割の利を附加收得し、5. 砂糖に砂は混交せざるも燒酒には多量の水を混する等の不正手段を行ふは普通茶番事なるも憚むべし蒙人は毫も之に氣付かざるなり。

爲に當ビ一ン廟に在住せる既記行商人の如きすら尙一箇月平均銀二、三百兩の賣上ありと云へば邦人の之に著目し本據を蒙地重要市街地に置き日、支、蒙人を使用し各方面に行商を試み正々堂々支那商に對抗し家人の信用を集め或は未だ彼等の到らざる地點に發展を計らば必ず莫大の收利を見るべきは疑ふの餘地なし。

而して此の事業は大規模にも小規模にも即ち大資本にても小資本を以ても隨意實行なし得る最も輕便有利の仕事なれば我が同胞の是非之に注目し速かに調査實行せん事を切望して止まず。

D、當地方の甘草

小巴林王府出發以來高麗城迄は沿道到る處甘草を見るも就中セルホトエロよりソソフイン廟間最も多く亦大なるもの多し而して未だ曾て之が採掘をなしたる事なきは運賃の關係に因るならんが四鄭鐵道にして將來開得迄延長するに到らば目下南方に之を採掘し盡しつゝある甘草界の中心は追々此の邊に移轉し來るの時ある可し。

九月二十三日 降雨午後三時雨止
曇天となる 温度最高六十度 最低四十五度

黎明の頃より細雨疎々として煙を罩め雲霧山河を蔽ふて陰々漠々たり而も身は興安山脈中遼の古城趾を眼下に眺むる喇嘛廟に宿して雨聲に和する寂しき讀經の聲を聞く萬里異郷孤客の旅情傷まざらんとするも豈に得べけん哉。

午後三時頃雨止みたるを以て四時より廟を出で出撥子を訪ひ調査する處あり歸路二、三の僧を尋ね午後六時歸り夜中讀書。

夜に入りて支那兵十騎計り西方より來る其の語る處によれば經棚北口駐屯の馬隊にして當地に駐在す可き馬隊一營の宿割りとして先發來著せしもの本隊は明二十四日到著の豫定なりと之により察するに林西方面蒙匪の壓迫を大に感じ居るものと如し。

九月二十四日 半晴半雨 温度最高六十二度 最低三十八度

余は高麗城より直ちに北行烏珠穆沁旗に入る豫定なりしも牛車及道案内雇入れの都合と北行を支那兵に知らしむるは有利ならずと思はるゝの點あれば東行ヤーマン村に到り梅倫タイジフ君と相談の上萬事を決定せんと午前七時ビリン廟を出發す國亡びて山河あり歩歩總て歴史の跡ならざるはなき平原を東に走る事十支里イスネラ(包一五、牛八〇〇〇、馬五〇、羊二〇〇〇)を通過しウリジムルン河に沿ひ東南行三十支里チャビネラ(包二〇、牛二〇〇〇、馬七〇、羊七〇〇)を經由十五支里にして公主陵の守護寺たるヤーマン廟(喇嘛五十名)を右に眺め更に東行五支里午後一時ヤーマンネラ(包二〇、牛一五〇、馬七〇、羊五〇)に達し梅倫タイジフ君に會ひ當地より西烏珠穆沁旗に北行の事を計りしに第一道路の良好ならざる事、第二民國二年以來蒙匪騷動の結果沿道の住民四離滅裂なしたれば途中宿泊、馬糧等に就て大なる困難に遭遇す可き事、第三小巴林王府より信書に阿魯科爾沁迄護送せよとある事(余は小巴林王府にて阿魯科爾沁王府に到る旨云ひ放ちたり)等の理由により能ふ可くんば阿魯科爾沁王府に行き夫れより烏珠穆沁に向はれたし然しながら是非共當地より北行せらるゝとなれば無論出來得る限りの保護をなし便宜を計るも既記三項は豫じめ覺悟し置かれたし最も千萬の返答なれば熟慮の上一應阿魯科爾沁王府迄進む事に決したり同梅倫は配下として屯田式の兵十五名を有し近郷に於ける一勢力

たり同君の許にて日本大谷製仁丹牌洋火を見受く。
牛車雇換のため大いに手間取り午後五時ヤーマンネラを發し東行二十支里コルブソムネラ(包一、牛五〇)更に東北行十支里ホシヨネラ(包一、牛二〇、羊三〇)ベイル君の蒙古包に投宿せしは午後七時本日通過の道路頗る平坦路側何等の農作物を見ざるも放牧の家畜は到る處に之を目撃す。

今宵は家主に若干の焼酒、氷砂糖等を土産にも贈呈せしに彼等亦之れに報いんとてベイル兄弟はホーラ(四絃の胡弓)チョーロ(形は三味線に似て二絃)の合奏をなせば一族の者等打寄り來り節面白く蒙古歌を合唱し余等一行の旅情を慰め呉れたれば樂く夜を更かせり特にチルハ、チルハの美しき姉妹が朱唇より漏れ來りし唄はベイル兄弟の奏曲と共に遂に吾人を惱殺せしめたり。

將に此の幕終らんとする際ビーシン廟駐屯の曹辦帶より開魯なる常統領宛急用信書次の驛迄送り届けよと蒙古人の使者入り來れり信書の端に烏の羽根を挟みをれり之即ち急用を意味するものなり。

A、蒙古人と焼酒

蒙古人は男女共に焼酒を好む事非常にして其の酒量に至りては實に驚く可きものあり今試みに葉煙草や氷砂糖を與へても謝意を表すべく頭を下げぬ奴に焼酒を與へんか必ず三拜するを見る可し然して彼等の之を飲まんとする際自己の中指或は無名指を酒杯に差し込み其の二三滴を拾つ之れ其の初を佛に捧ぐるの形式なりと彼等は普通冷にて飲み盃は擲して大形のものを使用する。

B、高麗城に對する蒙古人の迷信

高麗城跡に某蒙古人が包を建て之に住みたる事ありしに夜に入り包内に寝るも朝に至り目醒むれば身は何時の間にか城外に出で地上に寝ね居たりと云ふ彼等が事實と信じ居る話あり蒙人は之を以て城内に何等かの靈あるものとし其の後此處に住ふものなく又城内の土地を掘る時は直ちに目眩み或は頭痛を覺ゆと言ひ傳へつゝあり。

C、旅行者と新鮮なる牛乳

蒙地到る處盛に牛を放牧せるを以て若し牛乳を求めんか殆ど隨意隨處に之を得べく從て吾人旅行者は三度に一度之を食事の代用となし大いに便利を感ず。

G、蒙古牛車の道路破損程度

純蒙古地帯を旅行するに假令道路平坦ならざるの地點を通過するに當りても開放地帯に比し進行大いに易々たり之純蒙地は車輛として道路を通過するは積載極量三百五、六十斤の車體輕き車輪に鐵輪を裝せざる牛車(車輪の地面に接する箇所幅廣し)のみなれば道路を破損する事比較的少く爲に同地方の道路大いに佳良なり。

E、放牧せる家畜群の狀態

沿道に日々目撃する放牧の家畜に就て一言せんに家畜は其の種類により天稟の性質を異にし一舉一動自ら差あり一進一退亦同じからず馬匹は特に集合するの性強く一團となり決して個々離散することなし即ち一馬去れば殘餘之に従ひて走り止まれば又停まるが如く常に嚮導たる一馬ありて其の行動に従うて一群一致共同の所作を取る而して他畜の之に混入せるを見たる事なし。

牛亦群を形成せるも時々隨意に草を索め遠く離散し居るを認む之れ概して集團性に乏しき證にして嚴重なる監視を要する所以なり。

羊群は概ね綿羊、山羊の混交にして余が迄の經過地方に於ては山羊、綿羊に比し多く四六乃至三、七の割合なるが如し總て羊群は行動一致せず且つ性質柔弱なれば猛狼の襲撃を

受け易く最も嚴重なる監視の必要あり然して牛、羊の混交せる放牧群は稀に之を見る事あり。

九月二十五日 半晴半曇 温度最高五十七度 最低四十三度

午前七時ホシヨネヲを出發し支那行商人に就て調査せんとコルブソムネヲ迄十支里の道を引返し調査を終り再度ホシヨ村に歸著せしに今日未明迄にヤーメンネヲ梅倫タイジフ君の許より來る可き筈の道案内の兵未だ來らざれば余は隨行の蒙古人をして馬にて梅倫の處に走らせ先發の牛車を追ひ東北行十支里ルン廟(廟一坐、僧房二〇、僧侶八十餘人)に之れを待つ事とせり暫時にして使者は一名の兵を伴ひ歸り梅倫の言譯として余に傳へて曰くビトシン廟東北五十支里トモフジウ村に蒙匪十三名出現せしこの報昨夜傳はるや部下の兵殆ど逃亡し今漸くにして其の一名を捕へたれば貴一行の後を追はせんとする處なりしと之れにより察するに昨夜ホシヨネヲに於て見受けしビトシン廟曹辦帶より常統領宛の信書も多分此の報告なりしならん而して余等通過地の牛車は開魯附近に匪徒討伐のため出陣せる常統領配下により殆ど微發せられをり。

午後二時シン廟發東西南北は遠く山を控ふるも西南より東北に打ち開ける平原を東北に向

つて急行する事四十支里降雨の際は河と變する凹地に達す右方ボロホスタイ山麓ゆるを見
る此の山と此の凹地を以て巴林旗、阿魯科爾沁旗の境界とす更に進む十支里阿魯科爾沁王
專屬の狩獵地たるハロリノル山(一名シナハラ山)を越ねんとする頃日は全く暮れて皎々た
る秋月出づ雜草の影を踏んで寂寥たる野道を凄愴の感に打たれつゝ通ること三十支里午後
八時三十分トギネラ村(包一、牛一〇〇)ステン君の蒙古包に投ずシン廟トギネラ村間八十支
里、人影は無論一疋の家畜をすら認むる事能はざる所謂無人の境にして道路は雜草を以て
覆はれ交通の極めて稀れなるを證す。

此道や行人なしに秋の暮れ

A、コルブソム村に於ける支那行商

當村に烏丹城より來りて日用雜貨の商ひに従事せる王某に就て調査するに

(1) 現金賣價格表

品	目	單位	價	格	摘	要
燒掛	麵	一斤	銅元	二十枚	二把を以て一斤とせざるも事實十二、三兩なり	
酒	同	同	同	四十枚		

白	葉	洋	紅	白	氷	粉	磚	麻	鼻	大	中	棉	月	美
煙	草	火	糖	糖	糖	子	茶	油	煙	布(白)	布(藍)	花	餅	茶
一斤	一包(十箇入)	一斤	同	同	同	同	同	同	同	一秤(十六七)	一疋(尺三十二)	同	同	同
銅元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	銀	同	同	銅	同
十六枚	四十枚	三十枚	六十枚	八十枚	百二十枚	三十枚	百枚	四十枚	百枚	一兩八錢	七錢	八錢	四十枚	六十枚
										物指は布巾を代用し使ひなれり	同			

備考 賣上の内五分掛賣、三分物品と即時交易、二分現金賣の割合にして掛賣には三割前後の利子を取り運賃は碎
銀子最も多く交通銀行票は銀六分に換算なしなれり。

純蒙古地帯旅行調査日誌

(2) 賣買二種の秤を使用せり

賣り出しに使用する秤は烏丹城の十四兩を以て一斤とし買入或は物々交換の際受取る品物に對しては烏丹城の十六兩を以て一斤となす。

(3) 出產品買入價格

今支那商が蒙古人より買入れ或は賣品の代價として受取り居る各品の價格を示せば次の如し此の價格は荷捌地たる烏丹城の相場により時々變動する事あり。

品	目	單位	價	格	摘	要
牛	皮	一	四	錢		
山	皮	一	五	錢		
羊	皮	一	八	錢		
馬	皮	一	二	兩		
	同	張	四	錢		
			五	錢		
			同		普通大	

(4) 營業期間

毎年春の初めに來り晩秋に掛金を回收して引上ぐ而して一箇月の賣上總額平均銀百四五十兩なりと稱す。

B. 蒙古犬と蒙古猫

蒙古旅行に當り最も恐る可きは各戸に必ず二、三疋以上を飼養し居る蒙古犬なり之等の犬は總て犖猛なる性質を帯び自家以外の何人が來るとも群り來り吠へかゝり咬みつゝを以て危險甚だしく就中余等は見慣れざる服裝の關係より此の難に遭遇する事連日の狀態なるを以て今は蒙古人に習ひ常に杖を携へ人家に到る節は之を揮ひ群り來る犬を威壓し進むか又は車上よりノホイホレ(犬に注意せよ)ノホイウジ(犬を見よ)と大聲に叫び主人をして之が見張りをなさしむる安全策を取りをれり。

今夜は牛車上に積み置きし余等一行の食用鶏犬に咬み殺されたり。

喇嘛廟附近僧房には比較的犬僅少なれば旅行者にこり此邊は安全地帯なり各包亦一、二疋の猫を飼養せるが日本にては曾て見し事なき灰色毛のもの最も多く性質は何等日本の夫れと異なる處なし。

C. 大、小巴林の境界

大巴林と阿魯科爾沁の境界に就ては既述せし通りなるが大、小巴林の分界はヤーマンネラとコルブンスムネラの中間にして前者は小巴林に後者は大巴林に屬しコルブンスム村には

大巴林の兵十名駐屯せり。

四〇

九月二十六日 晴天 温度最高七十度 最低三十八度

午前九時トデオラ發東北行五支里タリネラ(包四、牛七〇、馬)を過ぎ更に三十五支里草原中處々に放牧の家畜を望見しつゝ平坦なる道路を走り正午十二時三十分阿魯科爾沁王府に到着し直ちに旗務公署を訪ひ役人の周旋にてツンエ廟佛爺喇嘛の留守宅に投ず午後五時頃林西前敵司令部より派出せられ諜報勤務に従事し居る蒙古人來賓豪(超塵と號し朝陽出身)余の旅舎を來訪し余が大板上よりの行向不明なるを以て若し當方面に出現せし際は蒙匪の現狀を語り旅行上細心の注意を拂ふ様傳言せよと林西米司令官より傳達ありたる旨語れり余は元來今回純蒙地帯旅行に就ては種々考ふる處ありしを以て林西出發に際し米司令官と面晤の時大板上經由赤峰に赴く由答へ置きたるに如何にして余の行動を探知せしか今更驚くの他なし而して來君の話によれば數日前當地北方ハン廟の北に蒙匪六、七十名出現せしを以て同地附近に於て牛の買入に従事し居るたる露西亞人も引上來り兩三日前南下開魯方面に向ひし由尙同人は余を林西に於て見知り居れりと稱するも余は更に記憶に存せず。當王府支那商の家屋に常統領配下に屬する騎兵十名駐屯せり。

A、各王府の親切

余は林西出發以來經過し來りし大、小巴林王府に於ては牛車雇入れ馬糧の世話其他種々と非常なる優遇を蒙りたるが當王府も其の例に漏れず余等が寸志として贈呈せし些少の品に對し返禮として大なる綿羊一疋送り來り牛車雇入れ馬糧の世話は云ふ迄も無く頭等護衛總理希金滿都勒をして色々便宜を計らしめられたる厚意は吾人の深く感謝する處なり。

二十七日 晴天 温度最高八十度 最低四十一度

阿魯科爾沁王府滞在

午前十一時報告の記述を終り直ちに旗務公署を訪ひ明日出發に對する道案内及牛車等の件に就き相談する處あり歸路在住の支那商、王府の學校等に就き聊か調査する處あり歸來報告書を認む。

B、阿魯科爾沁王府

阿魯科爾沁王府は後方(北)丘陵を負ひ前面は打ち開けたる平原にして西傍五座廟を中心に百餘戸の僧房あり四百有餘の喇嘛を有し同王府に屬する王爺廟(ノインスム)にしてラマリンブナム、ヨンスン、チャミエンシリデンの三ゴゴン即ち三佛爺喇嘛は共に目下西藏に赴

き不在中なり普通居戸は王府の南方を流る、チャガンウルグ河を隔て、僅に十數戸散在せるのみ現王爺を汪沁浦爾贊と稱し本年三十六歳眉目清秀にして天資英邁なるが如し。

C、學堂と耶穌教

旗務公署に近く一の學堂あり之れ當王府の經營に屬する處にして教師一名喀喇同旗人白鳳齡(本年五十五歳)の下に旗居の子弟たる十二、三より二十歳位迄なる十一名の生徒を有し蒙學の外千字文、三字鑑、四書、五經等の漢學を教へ被服の自辨たる外食費、學費、全部王府より支給し休暇は陰曆正月一箇月間にして別に課業時間表の規定あるなく全然寺小屋式の城を脱せず教師に對する王府よりの平當は一箇年銀八十兩生徒は全部學堂内寄宿舎に寄宿せり而して之等生徒中より成績優良の者を選拔し王府の先生(タンチャイ)として使用する由此處に最も余の驚きたるは本日學堂を訪問し白教師と對話中彼れの机上に福音堂より耶穌布教のため配布したる蘭人之言、善惡の別、平安師爲福其の他有難き文句を羅列せる活版摺の紙片あるを認め以て何處より手に入りしかを問ひしに喀喇沁王旗に住する蒙古人鮑某より送り來りし旨を答へ尙彼は右布告文を讀みたる結果人の子の自覺に依つて神の子たる實を現はせし天帝の德を若干信じ居るが如き様子會話の節々に現出せり若し之を以

て思想單純なる兒童に臨まば彼等をして耶穌信者たらしむる事易々たるものあるべし。喇嘛教信者を以て埋まりをれる此の純蒙古に布教を試みると先づ一箇兒童を收容せる學堂を射りたるが如き機敏にして飽迄も徹底せる耶穌布教師の殊勝なる布教振りに對し我が佛教界の諸師は之を如何に思考する乎。

D、阿魯科爾沁王府に於ける支那商

本春余の來阿せし時は蒙匪騷動の影響により在住支那商の引上歸郷せしもの多かりため一商戸の外天幕生活をなせる行商人五組を數ふるのみなりしに現今は匪徒平定したれば再度營業を開始せんと目下唯掛金の回收に従事しつゝ其の形勢を看望しをる大記商舖を見るに至れり。

(1) 商舖の屋號其他

屋	號	主人出身地	摘	要
廣興	德山	山西	支那式の土造家屋に居住し居る土著商	
洪盛	長同	同	同	
榮聚	號北	京同	同	

木綿	綿	綿	綿	芙	月	麻	洋	洋	洋	鼻	葉	磚	氷	紅	白	白	掛
綿				蓉			手			煙		砂	砂	砂			
絲	絲	絲	花	羔	餅	油	拭	蠟	火	煙	草	茶	糖	糖	糖	麵	麵
同	同	同	同	同	同	一	一	一	一	一	一	小	同	同	同	同	同
								包(十箇入)	包(六箇入)	包(六箇入)	把(六重)	形一					
						斤	本	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤
同	同	同	大洋	銀	銀	同	銀	同	小洋	同	同	同	同	同	銀	小洋	同
二	一	二	一	三	二	一	五	一	四	一	三	三	二	二	一	一	一
元	元	元	元	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半
黑色絲	白色絲	藍色絲	交通票にて				尺三										銅元十二枚

(2) 現金賣物價表

粉	燒	中	愛	太	太	大	品
條	尺	國	連	連	連	連	目
子	酒	布	布	布	布	布	單
同	一	一	同	同	同	一	位
	斤	正				秤(十七尺)	單
同	同	同	同	同	同	銀	價
二	二	五	二	四	一	一	記
錢	錢	錢	兩	兩	兩	兩	事
			四	五	四	八	
			錢	錢	錢	錢	
			白	雜	紅	白	
			色	色	色	色	

備考 右の外天幕生活なし營業中の行商人烏丹城田某の外五組あり共に三四名の使用人なす。

義	德	義	乾	隆	同
長	盛	隆	永	盛	和
永	長	長	成	永	德
赤	同	同	同	同	山
峰					西
同	同	同	同	同	支那式の土造家屋に居住し居る土著商
同	同	同	同	同	土造家屋に住める土著商
同	同	同	同	同	目下營業に従事中

備考 使用する秤は九月二十五日コルアンソム村に於て支那商より調査せしものと同様にして買十六兩一斤賣十四兩一斤なり而して現金貨は金貨上の十分の一に當り他は掛及即時物々交易なりと云ふ。

(3) 交易により支那商の受取りをれる物品の價格

品	目	單位	價格	摘	要
牛	皮	斤	小洋五		
羊	皮	枚	同十二		
馬	皮	枚	銀二兩五錢	上等品にて	

E、當王府に營業せる支那銀匠鋪

楊某、張某二名の銀匠共同にて銀細工店を開業しをれり其の製造する主なる品目は婦人用頭飾、耳飾、鼻煙壺及喇嘛廟の佛具修繕等にして其の手間賃として收得する賃金は製品純銀なる時は一兩に對し五錢紅銅の加入しをれる銀は一兩に對し三錢なりと尙彼等は時々近郷に出稼を行ふと云ふ。

九月二十八日 晴天 溫度最高七十八度 最低四十三度

余は昨日夕刻より下痢をなし大便には僅少の血液混じをり若干發熱せしを以て本日出發を

見合す事とし空しく臥床せり林西出發以來一滴の酒も飲用せず毎日の食事も特に注意を拂ひ居たるにも不係大板上以來再度の發病之れ必ず過去に於ける暴飲の罪にあらずして何ぞと今更後悔せりと雖も既に遅し芭蕉翁の「旅に病んで夢は枯野をかけまはる」の句を思出す

A、阿魯科爾沁王府附近に於ける農業

當方面に於ける農作物は氣候の關係上、糜子、蕎麥の二種にして前者は分後者二分の割合なり豐作に際しては自家用に餘る僅少を支那行商人に賣るの程度にして今年は旱魃のため不作にして一般に陰曆來年の二月迄の糧食に足るのみの出來高にて其の最上等に屬するものも三月迄の自家用に足る位のものなりと而して其れが不足の分を購求するには豐作にして安價なる地方を選び開魯方面に或は林西、烏丹城方面に出掛け買入を行ふ由然して目下收穫時期なるの故を以て當王爺廟喇嘛の如き各自家に歸り之れが手傳に従事するを以て其の數殆ど平時の十分一に減じをれり。

四、阿魯科爾沁王府より西烏珠穆沁王府に到る

九月二十九日 晴天 溫度最高七十五度 最低三十九度

昨夜來發熱烈しく不快なるもタムスノール探鹽は晩秋の候に至り中止する由なれば愚圖々

圖すれば其の状況視察の機を逸する恐れあるを以て無理無體に病軀を推して烏珠穆沁に向はんと阿魯科爾沁王府より特に隨行せしめし道案内(チャムチン)二名を引連れ一行の井上本多兩君と共に王爺廟を出發せしは午前八時なり。

北行平坦なる草原を進む事四十支里左側砂丘中の老榆樹密林に數千の鳥の群れるを眺め須臾にしてホビ村(包Q、牛)に達し朝食に牛乳を啜り暫時休憩す前記砂丘附近に於ては石鐵の屑、鐵器の破片或は古土器等古代住民の使用せし道具散亂せる由此の村は民國二年蒙匪事變の際支蒙兩軍より家畜を強奪せられ其數從前の三分にも満たずと稱しをれり。

午後二時ホビ村を出で直ちに牧童に就てハンスムは何處なりやと問へば牧童遙に北方を指して曰く小なる砂崗の伏起せる一昂一低の砂道を行く事三十五支里更に坦々たる平原を走る五支里にして之に達するを得べし而して其の平原中に於て一小清流を渡らざるべからずと即ち此の道を行き午後五時三十分ハンスムに著し佛爺喇嘛アブリクチヒ氏の舍に投ず。ハンスム興安嶺本脈の一部たる紅山北方に聳ゆるハンス、マータ、ノムン、ソウルン、チエー、ジン、デンホルイン、チュトワ、チエレー、マノワの九座廟よりなり各廟の建築西藏式にして丹紅爛々金碧煌々壯麗を極む之等の廟を中心とし周圍に石造或は煉瓦造りの外面を白色

黒色、灰色、藍色等の塗料を巧みに配合し塗りたてある西藏式の僧房百有餘間隔整然として建ち列び其の間榆樹を所々に植ゑつけ山門の南下には清流を隔て雜草の茂生せる平原に放牧の羊、牛群を見る其景恰も佛畫にて見し西藏の如く又寫眞に眺めし歐洲片田舎の風景にも彷彿たり而して佛爺喇嘛アブリクチヒソボガン(在北京)ノムン(在北京)三名、大喇嘛三名管事喇嘛四名の外五百有餘名の喇嘛を有し寺屬の家畜は民國二年支蒙、兩軍より多數の掠奪を蒙りしも尙且つ現在牛二百、羊四百、馬五十、駱駝十頭を有しをれり。

A、佛像の据ゑ方に就て蒙古人の迷信

蒙古人は其の富めるも貧しきも必ず多少の佛像を家内に安置し之を信仰しをれり今此の佛像の据ゑ方に就て彼等有する迷信を喇嘛より聞くが儘次に述べん。

イ、佛像を前に傾むけ安置しおく時は家内に死人を生ず。

ロ、佛像を後に傾むけ据ゑ置く時は家中に病人を生ず。

ハ、佛像を右亦は左に傾むけ据ゑ置く時は家畜病死す。

B、牛買出しの露西亞人

當ハンスムを去る東北五支里シャルタ村に四箇の天幕を張り之を根據として近郷より

牛を買集めつゝある露西亞人あり彼等に就て調査したるに彼等の一行は露西亞人トパーズ
セメン、ゼノビー(以上三名四十年度)ミハール(二十七年、八年の青年にして支、蒙兩語に
通ず)四名蒙古人通譯二名にして本年陰曆五月海拉爾より當地に來りし以來買入牛數合計
一千餘疋にして之が輸送は普通三百餘頭を以て一班とし之に監視として四、五名の蒙古人
を附し海拉爾に追ひ行く。買入價格は頭數を以て論ずるも内一斤銀一錢當りの見當なる由
にて代價は全部碎銀子にて支拂ひをなし大巴林に於て同國人が牛買入に際し課税せられた
るも當地に於ては如斯事なし彼等日常の食物は黒パン、牛肉、牛乳、僅少の米等にして狩
獵用二連銃一挺、單銃一挺の外各自自動式拳銃を所持し現金は全部驛車に積み輸送し來り
しと天幕外に見る驛車四臺半車若干之亦一行の使用するものなる可し而して彼等は現在買
入約東濟の牛二百頭南方より兩三日中到着の筈なれば之が到着次第全員引上海拉爾に歸へ
ると稱しをれり。

九月三十日 晴天 温度最高七十五度 最低四十二度

昨日衰弱せる病軀を馬車に揺られ疲勞と發熱により苦痛言語に絶す以て余は熱慮の結果暫
時當ハンスムに滞在静養の上其容體次第にて目的地に旅行を繼續するか或は白音他拉太

田醫院に赴き治療を乞ふ事にせんと決意せり吁々幸事魔多し乎。

想へば今日は陰曆八月十五日即ち中秋觀月の節なり日落ちて風なく四面靜にして物の音な
し病床より仰げば秋露玲瓏一片の雲だになく十五夜の月は低くハン廟の老榆樹の間に懸り
清光溶々として上天下地を浸せりさらでだに寂しき秋の夜に故國遠き興安嶺中の一喇嘛寺
に病軀を横へて此の光景に接す夢の如き心地の中に思ひは何時しか走せて故郷に余の無事
息災を祈り給ふ慈親より各地に住める妹扱ては先輩、知己の事より轉々として我が三十年
間の過去に及びて轉た感慨に堪へず涙自づから溢れ落つ。

病氣の故を以て當初の目的と官命を捨て之より最も近距離の醫師所在地たる白音他拉に赴
くとせんに南六百支里(日本里にて百里)の山坂を行かざる可からず現在衰弱の程度と容
態は到底之を決行し得べくも有らず唯此處に静養し以て運を天に任かするの他別に良策な
し、噫。

十月一日 晴天 温度最高七十二度 最低四十五度

ハン廟滞在終日病臥。

十月二日 晴天 温度最高七十三度 最低四十三度

今日もハンスム滞留。

十月三日 晴天強風 温度最高七十四度 最低四十五度

ハン廟滞在。

今日病死せる馬の生々敷皮を天火に乾燥せるに鳥群り來り皮に附著せる肉を喰ひ居るを見る病中の余は之れを目撃して凄然異様の感に打たる。

十月四日 晴天強風 温度最高七十五度 最低四十六度

ハン廟滞在。

十月五日 晴天 温度最高七十二度 最低三十八度

數日ハンスムに滞在静養の結果若干回復せしが如き氣味あれば愈明日當地を發し烏珠穆沁方面に進行せんと決定す。

A、ハン廟に於ける支那商

當廟に喇嘛及近郷蒙民を相手にせる天幕生活の支那商一戸あり。六七年前より引續き營業せるものにして主人を楊某と稱し老嫗は烏丹城永長隆なりと今主に就て調査せし處によれば

現金賣物價表

品	目	單位	價	格	記	事
燒白	麵	斤	銀	一錢二分		
掛	麵	斤	銅元	十枚		
粉	子	斤	銀	六分二厘		
葉	煙	把	同	六分	三把にて大約一斤あり	
鼻	煙	同	同	五分		
棉	花	同	同	六分		
洋	火	包(十箇入)	同	六分		
洋	蠟	包(六本入)	同	二錢五分		
白	糖	斤	同	二錢		
水	糖	同	同	一錢二分		
紅	糖	同	同	三錢三分四	銀一兩にて三箇	
磚	茶	小形	同	一錢二分		
日	餅	同	同	一錢二分		

滿蒙古地帯旅行調査日誌

同	同	大	芙
		連	蓉
		布	羔
同	同	一	一
		斤	斤
同	同	同	銀
二	一	一	二
兩	兩	兩	錢
二	一	一	錢
錢	兩	兩	錢
紅	藍	白	
色	色	色	

備考 賣上は銀貨五分(支拂の節は物品を以てす)物品即時交易三分、現金貨二分(通貨は殆ど碎銀子なり)の割合に當り銀貨には右記價格の三、四割を以て記帳す賣貨に使用する秤は十四兩を以て一斤とせしめたり而して土産品の買入價格は牛皮十三四斤位のものを一枚にて銀三兩五錢、大山羊皮一枚銀六錢、大綿羊皮一枚銀七錢乃至八錢馬皮一枚一兩六八錢の見當なり、ハン廟を西に去る十支里バインホジョー村に烏丹城より來れる二組の行商人あるも物價其他ハン廟の夫れと同一なれば之れが記述を省略せり。

十月六日 晴天 温度最高七十度 最低四十度

旅に病みて衰弱甚しき軀を馬車に乗せ午前七時四十五分滞留中大いに優遇を受けしハンスームを出發し西行四十支里路側北一支里ムートルシロン山南麓に遼時代の墳墓二箇を見物するに其の一墓の側には數年前附近の蒙人により發掘せられたりと稱する穴あり其の穴より窺ふに地中石を積み重ね築造せる室あり之に石棺を安置せるものと如く附近に散亂せる墳墓用石材に美事なる彫刻ある點又は墓の周圍に東西百歩、南北百十歩石を積み上げたる圍(現在の高一尺、幅三十四尺)有る事等より指定すれば之必ず王公を祀れるものなる可

く之れ既述の高麗城及ハン廟を去る西三十支里に位する白城等と共に考古學者歴史家等の好箇の研究材料たらん。

蒙古人が右墳墓を發掘し小穴より石室内の棺側に到りしに全身白色に變じ即死したるを以て以後之を恐れ何人とも雖も手を下さず者なしと道案内の蒙古兵語れり之より南行二十五支里雜草中に煙の隠れ居るを見ること再三午後一時四十五分ソボグ村(五、牛五〇〇)に於て小憩食事を済して午後三時半發谷地を追ふて西に進む事二十五支里午後五時二十分オボン廟(廟八〇〇)に著しヘブルゴン喇嘛オボホン君の僧房に宿泊する事となれば此の廟は民國二年以來討蒙の支那兵により再三、言語同斷に荒され現在寺傾として僅に馬十、牛十の家畜を有するに過ぎず又西藏式の廟も僧房の内外も共に昔日の姿なく荒廢せる状態頗る慘憺なものなりと雖も前方(南)開ける平野には楡樹所々に繁生し近く摺鉢を倒にしたるが如き獨立せるオボホ山の背景として將に落ちんとする秋の日に峰の頭早や紫に染まれる連山屏風の如く兀立し風光極めて佳なり。

本日の行程中ハン廟ソボグ村間六十五支里全く無人の境たり。

A、鐵砲の脚

純蒙古地帯旅行調査日記

本日ハン廟より余等一行の道案内として来りし蒙古人の携へをれる鐵砲の銃床上帯の箇所
に兩脚寫眞機脚様のものを著けをれるを以て其の譯を問ひしに射撃に際し狙ひの狂はざる
様銃を乗せるに用ふるものにして烏珠穆沁旗人は狩獵用銃には必ず之れを附し蒙古語にて
之をボーネホロ(銃脚)と稱する旨答へをれり。

十月七日 晴天 温度最高七十度 最低四十二度

午前七時十五分ヲボン廟を發し西行八支里にしてタヘレ村(包六)十支里トナサ村(包二〇〇
羊、馬五〇)を過ぎ更に西南行七支里シムダ梁を越え午前九時バインボロコ村(包四、牛四)に
著し小憩す既記トナサ村は之迄九戸を有せし部落なりしも最近北方匪賊出現の結果北方
より南下し來れる十二戸を加へ現在二十戸を數ふるに到りしなりバインボロコ村は西南に
一小清流を有し南方榆樹林は阿魯科爾沁王府の所領に屬す。

休息中蒙人に對し施藥をなす患者瘰癧二、眼病三、梅毒二。

午前十一時四十五分出發道は依然として西南に向つて進み兩側に連峰控へたる谷地にして
行人稀れなる爲め脚を沒する雜草通路に繁り各山腹より山麓にかけ紅黃相交はり恰も錦綉
の如き杏樹(杏)の核より油を製し種子は佛前に上げをれるを時々見受く或は既に全部落葉

る榆樹の若木散在し秋色を飾りをれり此の道を疾驅午後二時アルチカ山を突破し之より道
は一昂一低午後三時三十分小巴林旗と阿魯科爾沁旗の旗界たる海拔三千七百尺高峰ウヌグ
ント山を越え(旗界の標として石を積みたる鄂博山頂に在り)午後七時十分ハラガトー無名
部落に著せし時は日既に暮れたるを以て今日はトサラクチネラ迄との豫定を變更し此處に
宿る事とせり本日行程百二十支里本部落は去る陰曆八月初九日夕刻アグイスムに出現せ
し十三名の蒙古馬賊同廟の喇嘛を恐喝し皮襖十三枚、皮製長靴十三足銀若干を掠奪し去り
たる報に接し之迄再三匪徒、支那兵に苦しめられ辛き經驗を有せるトモホジュ村(別名
ボシヨネラ當地を去る事五十支里)村民が又かと狼狽逃避し來り居住せるものにして合計
十四戸、牛百餘、羊八十の家畜を有せるも馬は民國二年及び五年兩度支蒙兩軍に掠奪せら
れ現在僅に一頭を有するのみなり而して彼等の住む可き蒙古包も未だトモホジュに取り殘
せしものあれば現在各包に對し八九名宛位住ひをれり唯一の財産たる家畜は年々匪賊の掠
奪にあひ最愛の妻犯さるゝも訴ふるに處なく家あるもの之に安居する能はず天下憐む可き
は無辜の蒙民なる哉。

A、地圖に現はれをらざる通路

六日出發せしハル廟よりオボンスム經由ハラガトー迄の道路は未だ邦人の之を通過したる者なかるべく各種地圖にも未だ此の道路の記載しあるものを見ず。

B、鄂博に就て

蒙古旅行者は山頂或は平地到る處に於て鄂博と稱し石を積み重ねたるもの土を盛りたるもの或は樹枝を積み重ねたるものありて其の内部には喇嘛教の經文亦は佛像の破損したるものを納め上部に木製鷹又は布製白旗等の建てあるを見る可し之を李京王を祀るものにして其の一鄂博なるは李京王のみを十三鄂博なるは其の子息十二名を合せ祭るものなりと云ふ而して毎年陰曆七月十三日之が祭典を施行し儀禮として地方部落民集合し羊、牛の生肉、焼酒等を供へ住民の安寧息災家畜の繁殖、作物豐饒を祈り數名の喇嘛を招き讀經を乞ひ延、太鼓、長喇叭等の樂器を鳴らし喇嘛樂を奏せしめ式終れば相撲、競馬を行ひ歡樂を盡す。

C、競馬と角力

蒙古人の娛樂として數ふ可き主なるものに競馬と角力あり競馬は鄂博祭に餘興として必ず之を行ひ各自自信ある良馬に跨り普通五、六支里位の距離を一直に馳せ競馬するものにして一著より五著迄には王公所在地に於ては王爺より其の他に於ては廟住職亦は部落長貴品

を與ふ角力は各部落の青壯年打ち集り二組に分れ各組より一人宛皮製の短衣を着け登場し力を角し現今北部蒙古に此の戲盛なりと云ふ。

D、支蒙兩軍の掠奪振り

民國二年及五年の兩度共に支蒙兩軍より掠奪を受けたるハラガトー村民より兩軍の掠奪振りを聞くに蒙軍は唯必要に迫れる乗用として馬、食用として牛、羊の家畜を犯すのみなりと雖も支那軍に至りては乗用食用に充てたる殘餘は之を賣却し酒色に替へんとの目的にて出來得る限り家畜の掠奪を行ふの外蒙人の命より二番目の賣たる佛像を始め日用家具類婦人用裝飾品、男女老弱用各種衣服類等の金錢に替へ能ふ物は何の區別もなく手當り次第掠奪し若し之に應ぜざる者あらんか或は殺し或は打ち海嘯の一時に襲ひ來りしが如く一物と雖も餘す事なく現に當部落の婦女にして耳飾りを取り上げられる際耳朶に通せる穴の邊より引き切られたる者あるのみならず亦言語に絶する……と其の殘忍極りなき暴行を異口同音に語りをれり。

E、茶の代用として樹葉を用ふ

近來打續く騷亂の結果多大の影響を蒙りをれる蒙民は購入金の關係より元來非常に嗜好せ

し磚茶をすら飲用する事能はざる者多く爲めに彼等は窮餘の策として之が代用に陰曆六、七月の候ウル樹の葉を採取し之を日光に晒し乾燥せしめ粉末とし用ひをれり之によるも如何に蒙地民力の疲弊せるかを窺ふに足る可し。

此日百二十支里の山坂を馳せ漸くにしてハラガトーに著し既記新來の蒙古包に投ずれば轉宅後時日短き事とて包の周圍には處々に大小の隙間あり加ふるに地面に直接薄き破毛氈を敷きたる上に寝ねざる可からず然も華氏二十九度の寒さ搗て加へて二十七、八日間も入浴せざるため虱は全身に活動を開始し寒さと共に一睡をだになす事能はず遂に午前三時半と云ふに跳起き燃き火をなし憂き多き旅を啣ち或は無辜蒙民の慘狀を偲びつゝ黎明を待つ。

十月八日 晴天 温度最高七十三度 最低二十九度

午前八時二十分ハラガトー出發ウジムルン河東岸の平野を西北に進む事二十五支里ヘレゲンタイ廟に到る蓋しアグイ廟に蒙古馬賊出現せし結果北方住民は悉く各地に逃走し同廟よりエンジギン廟迄一箇の人影をすら見る事能はざるの噂なるを以て此の道を進行西烏珠穆沁王府に到らんとする余は之が事實を確かむる必要あるを以て當廟住職に之を聞かんとてなり午前十一時二十分迄の休憩中住職其の他の喇嘛に就き之を糺せしに北方アグイ廟に

數名の喇嘛監視として留り居るの外假令人家あるも人影なかる可しとの返答なり而して斯く答へたる彼等も總ての道具萬端を取片付け何日何時にても引上げ出來得る準備をなしをれり同廟を出で西南行ウジムルン河西岸を走る四十五支里にして最近迄アグイ廟南五支里とサラクチャーネラより逃げ來れる小巴林旗協理臺吉サツチンジャバ君の住めるバルト村に著せしは午後二時十五分此の途中ウジムルン河の清流には蒙語にてハトリチャカツと稱する蛇に似たる二寸乃至七八寸の魚百千の群をなせると雜草中には多數の雉ブー(蒙名トクトク)を目撃すヘレゲンタイ廟はヘレゲン山の南麓に位し二坐廟僧房三十、喇嘛百名を有し民國二、五年支蒙兩軍の掠奪により現在僅に馬十、牛六の家畜を有するのみにしてバルト村は人戸十二全部既記トサラクチャー村の落ち人にして牛一千五百餘頭、馬二百、羊千百餘疋の家畜を有し各戸比較的富有なり余は途中露營の決心をなし其の準備を済し明朝を期し北行烏珠穆沁に向つて出發せんとするに當り此の行に就き萬事親切に世話なし呉れたるバルト部落長チングル君の厚志を感謝す。

協理は數日前より小巴林王府に赴き不在なり阿魯科爾沁王府より來りし道案内の役人は當バルトより今日歸阿す。

十月九日 曇天 温度最高六十九度 最低三十度

昨日夕刻ビーシン廟に駐屯せる支那兵一名バルトに來りしを以て其の用向につきて蒙古人に尋ねたるに時々ジョーシン廟とアグイ廟間を偵察のため往復する兵士にして此の間に存在せる各部落より糧食、燃料等を常に徴發し去るを答ふ。

昨夕より準備に従事せし露營の用意も不完全ながら整ひたるを以て午後九時バルト村役人及村民等に見送られ同村を出發し正午十二時ヘレゲンタイ廟を左側五支里に眺めウジムルの清流に沿ひ坦々たる大道を北行すれば左右の路側三十餘戸の土造家屋あるも附近一帯一疋の家畜をすら見る事能はず亦前記家屋も殆ど空屋同様にして唯三、四戸に於て引上準備中の人影二、三を見るのみ之れ既述せし蒙古馬賊出現の結果なり元來此の附近は土造家屋の外五十有餘の蒙古包ありしも今は其の一箇すら無く之れトモホジユ村（一名ホシヨネ）の新しい舊跡にして之より益々北行すれば再び道路の右側二戸の比較的廣大なる土屋あり之れバルトに引上しトサラクチーの最近迄居住なしをりたるものにして此邊一帯をトサラクチー村と稱し三十餘戸の包ありしと雖も現存せるは右二棟の土造空屋のみ如斯荒涼たる光景を興安嶺中に目撃しつゝアグイ廟迄急げば途中家財道具一式を牛車五臺に積載

し北方より避難のため南下する憐む可き家族の一行と遭遇しウジムルを東岸より西岸に渡り蒙古犬の脚に負傷せるを見之れも馬賊のために手負ひせしものにあらざるかと疑ひつつ去る陰曆八月初九日馬賊に荒されたるアグイ廟に到着せしは午後四時三十分なり、アグイ廟は余の之迄見たる數多の廟が必ず南面せるに當廟は其の例に異り西に山を負ひ東面し二座の廟と僧房五十ヘブルガ喇嘛リエンチー以下二百餘人の喇嘛を有せしも去る九日避難以來喇嘛は殆ど南方ビーシン廟に逃れ僅かに數名の番僧留り居るのみなり。

ヘレゲンタイ廟より西北行し西烏珠穆沁王府に到る道路ありと雖も之れ間道にして途中處處に峻峰を越ねざる可からず然るに余が現在進行しつゝある當廟より北行の大道は西烏珠穆沁王府を経てタムス鹽湖に通じ同鹽湖より産出する鹽を高麗城子經由阿魯科爾沁、開魯方面亦是東、西扎魯特方面に運搬する要路たり探鹽期中に屬する昨今此の途中に於て多數の運鹽牛車と遭遇せざる可からざるに此の事なきは之れ附近蒙地の平穩無事にあらざるを暗示せるものならん今日の途中に於てトモホジユ村の東方に聳ゆる山骨に石灰を使用し西藏文字にてランマンバトメホン（南無阿彌陀佛）と樂書したるを見たり。

今アグイ廟番僧より聴き取りたる蒙古馬賊來襲の概況に就て次に述べん陰曆八月九日夕刻

十三名よりなれる一團の蒙古馬賊各騎馬にて（各自一挺宛の銃を所持せるの外自働式拳銃を合せ持ちをりたる者六七名ありしと）乗馬以外更に十六頭の馬を引き連れ東北路より突然アグイ廟に襲襲し先づ喇嘛の全部を或る一戸の僧房に押し込め然る後大喇嘛チエリチに向ひ毛皮外套十三枚と皮製長靴十三足及び銀の有るだけを提供すべく命じたるにチエリチ言を左右にし之に應ぜざりしを以て賊は大に憤怒しチエリチを大釜（廟祭に使用する大釜各廟にあり）に入れ下より火を炊き同喇嘛を左右に轉がし恰も豆を炒るが如くにし更に之を引出し高小手手に縛り梁に釣り下げ一把の線香に火をつけ之を所嫌はず皮膚につけたるを以て喇嘛も遂に其が苦痛に僻易し不當なる要求に應ずるに至りしを以て漸く命だけは取り止めたり斯くて彼等は同月十五日迄同廟に悠々滞在し各僧房より目欲しき品を掠奪し之を十六頭の馬に満載し同月午後八時頃東北に向つて姿を沒したりと、然して滞在中は全部の喇嘛を一戸に監禁し亦外來者は何人を論せず同様の手段を取り日夜を分たす三名の見張りを山上に置き尙ほ二、三萬の同勢一、兩日内に來る旨を吹聴し居たり此の匪徒は或は蒙軍が支軍を計るための計畫にて派遣せしものにして其の掠奪は彼等の内職にあらざるかと思はるゝの點ありアグイ廟は先年の亂に際し支蒙兩軍の手痛き掠奪により現在の家畜數ふるに足らず。

に足らず。

十月十日 晴天強北風 温度最高六十四度 最低三十二度

蒙古馬賊に荒されたる憐む可きアグイ廟を午前八時に出發し東西に山連り南北に開けられたる谷地の平坦なる良道を北行午前十一時ウジムル河畔に恰好の地を選びて少憩用意の牛糞を燃き粟汁を啜り兎も角も腹をつくり午後一時ヲランゴ（地名）を出發再び北行午後五時ヲジールト稱する地に達す此地は南北に山を控へ其の間ウジムルン河流れて河畔柳樹繁り風を避け薪を得河水を用ふるに便にして夜營には頗る屈竟の場所なるを以て今宵は此處に露營する事に決すヲランゴ以北は山と云はず野と謂はず楊樹、榆樹、柳、樺、柏、杏等の樹木を見しが露營地ヲジール附近に來れば之等樹木益々多く岩石峨々たる深山幽谷中に各種樹木の自然的に而も巧妙に配置せられある景佳絶雄大なる善く筆舌の盡す處にあらず嗚呼此景此情獨り余等旅行者のみが擅にし得る天與の特權なり。

夕食の粟粥を啜り午後八時迄焚火して暖を取りつゝ之も同地に露營せる烏珠穆沁より巴林方面に向ひ糧食仕入に赴くと自稱せる蒙古人四名等と雑談をなし興安の峰を枕とし夢に蒙古を呑まんなど戯れて横臥すれば南方に聳立して最も景勝なりし秀峰今は暗に浮びて

天を厭せる巨人の如し首を回らせば余が馬車に挿める日章旗は雨露に色褪せながら興安嵐に翻々と勢ひ好く翻へり痛快言はんかたなし。

本日アグイ廟より七十支里を進み來りし地點に於て左右兩側に高麗城の外城を望見せり今日の總行程九十支里途中旅行者の露營せし形跡を所々に見る。

十月十一日 晴天北風猛烈午後九時より降雪 温度最高五十二度 最低三十一度

今日は興安嶺本脈の脊梁を越ゆる可からず余等が昨夜露營なしたるラジールより烏珠穆沁に到る可く興安嶺を踰ゆるに東西の兩道あり西道を行けば道程東道に比し稍近きも道路頗る險惡にして其途上のポイントが梁の如きは大小の岩石到る處に突出し到底車輛の通過を許さずこの事を聞知せしを以て余は東路を進む事に定め未明に起き出づ山麓の谷未だ眠れる午前六時と云ふに先づ一行の荷物を積める牛車に一名の蒙古兵を附し先發せしめ余等は柳枝を燃し暖をとり午前六時三十分印象深かりし夜營地を引上げ北に向つて出發すれば行程二十支里の邊より道は漸く爪先上りとなり峰巒東西より迫りて豁谷益々狹隘となる即ち余等は興安の脊梁たるメールト梁に差懸れるなり此の谷地を走れる山道を非常なる困難を犯し進行するに路面凹凸甚だしく加ふるに大小の巖石路上に散亂し車行甚だ容易なら

ず又頗る不快なり如斯確たる石運或は山腰を過ぎ又は懸崖絶壁を横ざり路傍柏、樺、柳杏、楊樹等の叢林を繞て流るメウジムルン河の水聲潺湲として自然の樂を彈するを聴きつつ進行すれば路は益々險阻となり軌馬、牛を鞭撻するの音ホウホウの懸聲喧しくも亦壯快なり漸くにして此の道中に於ける最高峰たるメールト梁アスルンタバ峠の絶頂に達すれば石を積みたる大鄂博あり之を以て小巴林旗西烏珠穆沁旗の境界とす即ち之れより南は巴林旗にして北は烏珠穆沁なり巴林旗は昭烏達盟に屬し烏珠穆沁旗は錫林郭勒盟に屬す（此の盟に就ては終りに詳述せり）此の絶頂より過ぎ來し南方を顧み亦前途を眺むれば脚下千峰萬岳簇々として波濤の如く一羽の大鷲悠々として天に舞ひ光景更に雄大を加ふ西側叢林鬱茂せる邊に少憩の後出發すれば暫時は傾斜急なる下り坂なるも後は一昂一低の緩漫なる波狀道となり降るに従つて樹木を見る事少なし頂上より四十支里午前十一時半セルハタと稱する平地に達し朝食を喫す此邊山野の別無く一面牧草を以て覆はれ谷地亦大いに廣闊せるを見る抑も興安嶺は黑龍江のアルグン附近より起り西南方に向つて進み遂にシラムレン流域の上源地たる克什克騰附近に到りて終り東戈壁、西戈壁を分界する大嶺なり所々に繁茂現存せる樹木により推考するに之れ昔日此の山嶺が一面の樹林なりし事を證し得るものあ

り而して現在望見する所によれば各峰の南面に比し北面即ち日當り惡しき箇所は樹木茂り而かも樺、柏多し、午前中の行程七十支里。

午後二時セルハタ(地名)出發の頃より朔風益々烈しく寒氣骨に徹するも幸ひにして繁茂せる牧草は地面を覆ひ開拓地方に於けるが如く黄塵に塗みることなく坦々たる道を西北に向ひ一氣に走る事六十支里午後六時三十分秋の日は既に西山に落ち暮色蒼然たるの時舊東烏珠穆沁王府に通ずる淵然たる大谷地を北に望みエンジン廟に到着す今日午後の行程中に於てセルハタより二十支里にしてチユリヒン河を渡り頗る緩慢なる小丘を越えエンジン廟前のエンジン河の小流を渡りしが同廟附近の狭少なる地域に曹達の白く地面に現はれをるを見たるのみ如斯にしてアグイ廟エンジン廟間二百二十支里無人の境を過ぎ來れり。

アグイ廟は北に山を負ひ南平野中を流るエンジン河に臨み三座の廟と僧房六十を有しゴゴン喇嘛モムゴンハム以下二百五十餘名の喇嘛之に分住せり客年の騷亂に支那兵及び蒙匪より掠奪を蒙りしも尙牛二百餘疋、馬百餘頭を有しをれり當廟には西烏珠穆沁王府より派遣せる蒙古兵二十名駐屯せり此等の兵は昭烏達盟各旗の蒙古兵に比すれば服裝、態度等

總て兵士らしく若し眼珠の色を變せしめば之を露西亞兵と云ふも更に疑ふ者なかるべし。亦エンジン廟の構造は之迄の旅行中に見物せし數多の廟に比し何等異なる處なしと雖も僧房に至りては之迄見しものが總て西藏式にして石或は煉瓦造なりしに當廟の其れは悉く造支那式なるは大いに不可思議に感ぜられたり而して人間の容貌も昭烏達盟人に比し若干異なるが如く大體に於て露西亞人に酷似せる者、佛像に似たる者多しと思ひしは敢て興安嶺を越え錫林郭勒盟に入りたる精神上の作用のみにあらざる可し此の事は注意研究すべき事と考へをれり。

午後九時より朔風益々凜烈なると共に雪霏々として降り出したり僅か一日の差を以て此の降雪を昨夜の露營地に免かれ得しは天に向つて大いに感謝するものなり。

A、盟と内蒙古行政區劃

今内蒙古行政區劃を記述すれば次の如し。

東四盟—哲里木盟、卓索圖盟、昭烏達盟、錫林郭勒盟
西二盟—烏蘭察布盟、伊克昭盟
内蒙古
歸化城土默特

察哈爾八旗

七〇

盟とは地勢上其他共通せる利害關係を有せる數旗の同盟にして若し事あれば互に相會し之を議す盟に盟長、副盟長あり余の旅にも關係深き昭烏達盟の盟長は奈曼旗王にして錫林郭勒盟盟長は阿巴噶大王旗王副盟長は西烏珠穆沁旗王なりとす今參考として前記二盟中の旗名を次に記載せん。

(1) 昭烏達盟に屬する旗名

敖漢左右兩旗、奈曼旗、巴林左右兩旗、扎魯特左右兩旗、阿魯科爾科旗、翁牛特左右兩旗、克什克騰旗、喀爾喀左旗。

(2) 錫林郭勒盟に屬する旗名

烏珠穆沁左右兩旗、浩濟特左右兩旗、蘇尼特左右兩旗、阿巴噶左右兩旗、阿巴哈那爾左右兩旗。

十月十二日 降雪強北風 温度最高五十七度 最低三十二度

朝起き出で見れば夜來の降雪未だ止まず加ふるに北風益々猛烈に吹き吹雪は恰も地上より天に向つて雪を吹返すが如く野も山も一面の銀世界なり昨夜の降雪を以て當方面に於る本

年の初雪なりとす此天候にては到底出發不可能なれば遂に滞在に決す午前十時アグイ廟より余等を送り來りし喇嘛一名、バルト村より隨行せし蒙古兵一名、牛車曳き一名歸路につくどて挨拶に來たれば其の勢に報いんと若干の贈品をなせしに三拜九拜厚意を謝し立去れり而して右牛車曳はバルトに在住せる小巴林協理のボーロにして性質頗る從順且つ正直なりボーロとは恰も奴隸の如きものにして王公及び重要な地位を占め居る役人又は富豪等は大概ボーロ數名を有す而して彼等はボーロに對し絶對的の權利を有し之が賣買をすら行ふ事を得ボーロの家族は子々孫々男女老幼の別なく永久にボーロたらざる可からざるも若し特別の功勞ありたる場合は使用者の考如何により此奴隸的境遇より脱せしめ普通の一家をなさしむる事ありと云ふ。

今日は終日報告の記述整理に従事し夜中旅行に一大苦痛を與ふる半風子狩りを行ひたるに大小の獲物多數なり午後五時半頃より降雪止み風勢亦衰ふ明日晴るればよいがと心に祈り午後十時就床。

十月十三日 晴天北風 温度最高五十五度 最低二十七度

興安嶺を横斷せし疲勞も昨日の休養により全く回復せしを以て今日は早朝出發する豫定な

りし處余は兩三日大便の通じなかりしと大腸の邊に多少不快を感じをりしを以て昨夜就床の際腸の掃除にもと甘菜を服用なしをきたるに本日午前三時頃に至り腹痛甚だしく引續き三回の便通あり後二回は便中に少なからざる血液混入し同四時半頃に至り腹痛は止みたるも下痢及び出血のため衰弱疲勞甚だし午前十時に若干の牛乳を啜り進むも退くも興安嶺北と殊更に元氣をつけ同十一時エンジン廟を出發する事とはなれり。

余は病魔に侵されをり然も輕症にあらざるなり全身に熱あり元氣無し雪に埋れし大波狀の野道を西北に進行し行くこと三支里にしてナムト村(包三、牛五)を通過し更に四十七支里を走り午後二時三十分ジウホタカ村(包七、牛一〇)に著し牛車及び兵の交代もあり身體に不快をも覺ゆれば今日は此の村落に滞在する事とせり此の村は民國二年及五年の兩度支、蒙兵より彼等唯一の財産なる家畜を多數強奪せられ爲に其後民力大いに疲弊せりと土人は嘆息しをり當地附近は所謂純蒙古地帯にして興安嶺の本脈以北何れの地と雖も一粒の農作物すら産するなく自家用糧食として用ふるものはタムスノール産出の鹽を巴林、扎魯特、阿魯科爾沁方面に運び行き交換し來れるものに係る。

余の投宿せし宿の主人タムチャ君の語る處によれば約十年前北四、五十支里なるチャグン

ダング村に外國人の夫婦者一兒を連れたる旅行者來りし事ありと之れ恐らく東京帝國大學理科大學講師烏居龍藏氏の事なる可し。

此の附近の住民は之迄旅行途中に接せしものと比較するに尙古風を存し人情亦質朴なり包の如きも之迄は多く屋根周囲はトロスと稱する草にて葺き蔽ひたりしも此の邊は之に換ふるに全部羊毛にて製せる毛氈を以てし婦人の髪の恰好も未婚者は何等異なりをれる點なきも既婚者に至りては頭の左右兩邊に辮子を組み之を長形の輪とし垂れ亦男女共に皮製長靴を穿ち其他日用の使用に供する毛氈、毛氈製袋の如きにも美術的意匠として面白き種々の縫取紋様を附せり此の縫取紋様は此迄の道中に於ても稀には目撃せし事あるも此の附近は一般に之を見る縫取用絲は駱駝の毛を撚りて用ひをり夜中主人等が余等一行の旅情を慰めんとて奏し呉れたる胡弓に合唱の歌を聞き終り午後十時就床すれば包の天窓より燐めく星一つ又二つ。

A、旅行者の注意を要する降雪期

將來旅行者の最も注意を要するは此の地附近に於ける降雪時期にして晩雪は普通陰曆四月上旬の候にして初雪は毎年普通陰曆八月上旬なるも時として七月下旬に降雪を見る事あり

本年の初雪は例年より大いに遅れ一昨日即ち陰曆八月二十六日午後九時なりき。

B、蒙人雞を初めて見る

余の今日滞留せしジウホタカ村村民は余等一行の服装(余等は洋服を着用せり)より携帯品に至る迄總て彼等の好奇心を動かし群り來り不可思議に堪へざるが如き眼を以て之を熟視し特に莫大小の靴下、シャツは伸縮自在なれば極めて驚きたるものゝ如く亦食用として携帯せる雞に就きては其の名稱より食物一日の食量等詳細の質問をなし終りにサイウジジ(初めて見た)と稱し非常に珍らしがり居りたるは滑稽なるも亦此の地附近民智蒙昧の程度を窺ふ可き好材料ならず哉。

十月四日 晴天西南風 温度最高六十度 最低三十三度

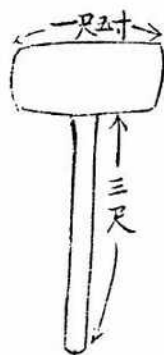
東方舊東島珠穆沁王府に通ずる道ありと稱する洋々恰も海の如き平原に臨めるジウホタカ村を午前八時出發平坦なる野道を西行すれば途中牛車五臺に家屋其他諸道具を積載し見慣れたる山水に告別し水草を追うて移り行く蒙古人の一族に逢ふ行程三十支里午前十時ハラス村(包二、牛二〇〇)に著し休憩食事の代用として牛乳を飲む當部落は最近南方半日行程たるスミネラより移轉し來りしものにして客秋支、蒙兩軍の兵により荒されしは例の如し。今

日出發地より余等の荷物を積める牛車を御し來りしは三十前後の婦人なり一般に蒙古人の女は外股に大手を振り歩き體格頑健にして騎馬を好くし何等男子と異なるなきが如きも其の夫に對しては頗る從順なるが如し。

今休憩中屋内にて見受けし彼等の手製の使用器具二、三を次に圖示せん。



糧食(粟、糜子)を搗き精白するに用ふる臼にして自然木を繰り抜き製したるものにして高さ二尺穴の深さ一尺二寸穴の口徑四寸位にして蒙古人之をオゴルと稱す。



此處にて搗くノトルと稱しオゴルに使用する杵。



ウーロール(絲を細きて巻く道具)

絲の材料としては羊毛、駱駝等の獸毛を使用するも大連布を解き絲を取りをりしを見たる事あり。

下圖はタルチグと稱し毛氈に布を覆ひ縫紮模様をなしたる袋にして茶碗等を容れるに用ふ。



高一尺二寸
口徑四寸

大人は既に毛皮製の衣服を着用し居るにも係はらず小兒は未だ袷衣又は單衣を着し素足のまゝ嬉々として遊びをれり蒙古人が一般に體格強健なる無理からの事なり。
當地附近純牧地のため穀物を大切にし其の一粒と雖も決して粗末になさざるは旅行中時々見受ける處なり。

正午十二時前五分バロス村を發し西行平原中の人となり午後二時ハロス河を渡り午後四時カトラ梁を越ゆ午後四時三十分ローブント村(包一〇、牛五〇、馬三〇、羊一二〇〇)に著しラーシー君の蒙古包に投宿す當村は南半日行程を有するホンドロンより昨日轉住し來りしものゝ由而して某家に於ては家中に病人ありとて十七、八名の喇嘛をハトラガ廟より招き祈禱の最中なるを見受く既に再三記述なししが如く蒙古人は常に水草を追ひ各處に轉

轉移住するものなれば昨日の部落も今日は無人の原と云ふ状態なれば旅行者は此の點に豫め注意を拂ひおかざる際は意外の失敗をなす事ある可し。

今日通過せし部落は何れも烏珠穆沁固有の風俗をなし既婚者は總てラジイと稱する袖なき陣羽織の如きものを普通衣服の上に被り亦妻たるの紀章として腰に金屬製のデーシルと稱する鎗下げを著け髪飾りに至りても銀に珊瑚其の他の寶玉を美術的に配合鑲ばめたるものを胸の邊り迄ぶら下げをれり。

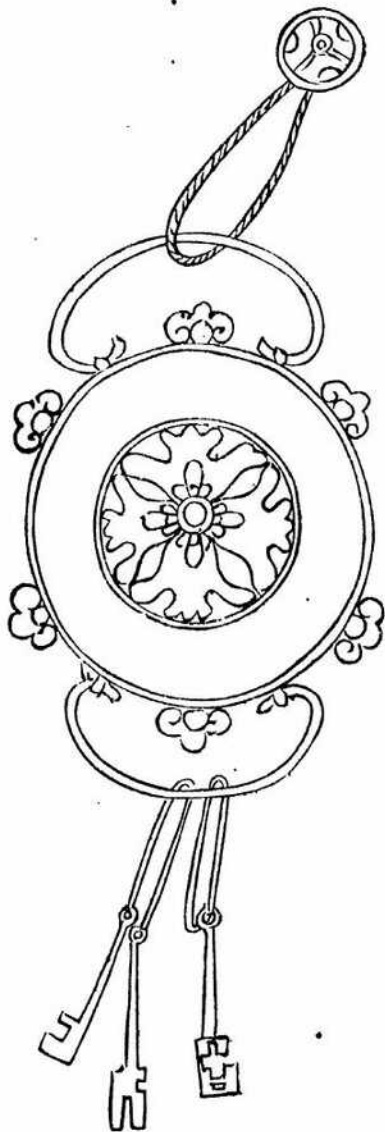
亦昭烏達盟各旗に於て家屋の周圍に建てありしホット(別名フラ、樹枝に牛糞を塗り著け造れる壁)マリンガル(畜舎、構造の工合はホットに同じ)の如きは更に見る事なく包の建て放ちにて家畜は日中放牧夜中は自己の包近くに集めをれるのみ。

夜中ラーシー君一族全部集り來り蒙古歌を合唱余等の旅情を慰め呉れたる時若き嫁女の髪飾り頗る美麗なれば幾何にて購求なせしかを尋ねたるに前頭用牛二疋、後頭用牛二疋都合四疋の牛と交易せしものなりと答へたり。

烏珠穆沁旗に於ては最近に至る迄結婚の常夜宴會の際花嫁たる者は必ず歌を誦はざる可からざる風習なりしも今は廢たれて此の事なしと。

次の圖は妻の紀章たるデーシル(實物の二分の一位)

七八



十月十五日 曇天西南風 温度最高六十二度 最低四十度
午前九時ローブントー村を出發丘岡により波狀形をなせる砂道を西行する事四十五支里零
時三十分ボクシンマン村(包一、牛八〇、羊一〇〇)に著し朝食を済し此處にてローブントー村よりの
牛車を交代歸村せしむ午前中の通過部落出發地より十五支里にしてスリニンネーラ(包六、馬
六〇、牛

一〇〇)の一部落のみなりしが道中水草を追へる二組の移住者に逢ふボクシンマン村は東半
日行程たるトロカ村より數日前移り來りしものなりと。

午後二時出發二、三の小岡を越わたるの外極めて平らかなる道を西に向つて進み午後五時
行程四十支里にしてウンゴルホーブル村(包一、牛四〇〇、馬一〇〇)に到著しラシチャムバト君の
包に宿る此の邊もエンジン廟以降の地方と同じく蒙古包の入口には毛氈にて作れる厚き
(普通厚さ八分位)暖簾を吊り之に駱駝の毛にて製せし毛絲を以て種々の縫模様を現はしを
れり此の暖簾はウードヌチクと稱し専ら家婦の作れるものにして蒙古美術の一とも見る可
く其の模様も蒙古人の意匠を遺憾なく表はせり。

余等の宿りしウンゴルホーブル村民は宿割りのため先著せし余の通譯たる蒙古人に猛犬の
群がりかゝり將に噛みつかんとするも之を追ふ事なく知らぬ振りせしを以て止むを得ず拳
銃一發を放ち之を威嚇し事なきを得たり亦宿主も初めは却々驕慢なる態度にて初對面の際
何にしに來たか云はぬばかり殊更に極めて應揚なる風を示したるも余の一喝に逢ひ掌を
返すが如く俄に一變して優遇をなせり如斯は蒙古旅行中必ず経験する事なれば此の呼吸を
心得置くを要す。

十月十六日 半晴半曇北風 温度最高五十八度 最低二十二度
昨夜十一時頃より胃腸のあたり殊に大腸と思はるゝ邊に發熱烈しく苦痛極りなければ遽に一睡をなさざりき林西出發以來病氣又病氣之迄の容態より推定し天命の既に近かつけるにあらざる哉と萬一の際を覺悟する事に焦慮せり過日來細心の注意を拂い一日二度の食事米汁亦是粟汁、牛乳の外固形物は一片すら口にせず爲めに精力盡き果て氣息奄々たるに至れり今日迄の旅も歩み出せし上は五十歩百歩だと唯氣ばかりにて來りし事は一行の井上、本多兩君も充分に知りければ余のため常に同情なしくれたり若し此の旅に於て私事の旅行ならんには既に之れを中止し今頃は入院中と云ふ幕なる可し。

身體の不快なるに大いに悲觀しつゝ午前九時ウソゴルホーブル村を發し直ちに北二十支里の地點にオランハラガ廟を眺め坦々たる平野を西に進み四十支里にして零時三十分ハツトントブ村(包六、馬五〇、牛二〇〇、羊四〇〇)に著し朝食をなす當村は近き北方より最近移住せるものにして包内の土間に牧草の生へをれるを認む休憩中一陣の旋風北方より吹き來り余等の休める包を吹き飛ばさんばかりの勢なりしに余等は太いに驚きたるも家内の蒙古人等が平然たりしは常に之を経験なしをれるものなるべし殊に病める余は何事にも氣弱くなり之れ何の惡

ろ兆ぞと心を傷ましめ無用の心配をなし座ろに家山を想起し天涯萬里の外に泣けり。
今當地に於て目撃せし蒙人自作の珍らしき器を圖示せん。



向て捧ぐるに用ふるものなり。

名稱 ホトコル

蒙古人の主食物たる糜子を炒る時に之を掻き攪せる道具にして炒りあげたるものを既に圖示せしオゴルにて搗精し食用に供す炒米即ち之れなり。

此處を下にして攪す。

午後二時發平地を行き山腰を過ぎ谷地を繞り砂地を横ぎりて西行五十支里途中出發地より五支里にしてホジリフンデ村(包一、牛三〇、馬二〇〇、羊二〇〇〇)を經由し午後六時三十分アレヌ村(包五、牛

A、蒙古一般的の燃料牛の糞

B、プレヌ村に於ける支那商

止めん。

燒掛紅洋月葵棉葉	品
煙 蓉	
酒麵糖火餅羔花草	目
一 同 同 一 一 同 同 一	單
包 十箇 △	位
斤 斤 斤 斤 斤 斤 把	價
銀 同 同 同 同 同 同 同	格
二 一 三 二 一 三 一	記
錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢	事
一把の重量六兩位あり	

普通一枚銀二兩位の見當になしなれりと云ふ

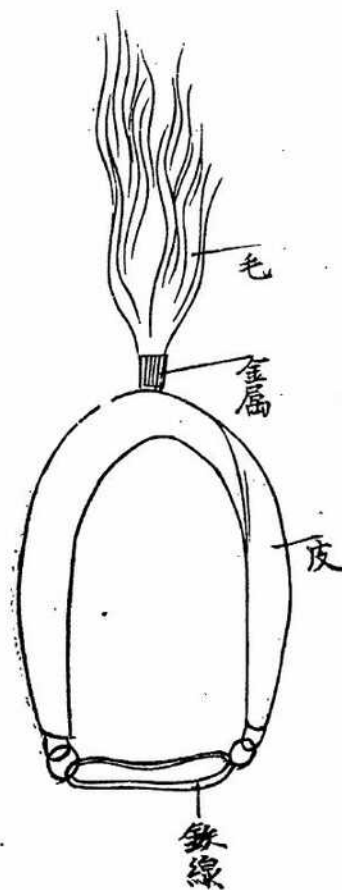
午前九時プレヌ村を出發し猛烈なる北風を侵し西に進み、二、三の緩慢なる傾斜を有する丘

純製古地帶旅行調査日誌

支里更に西に向ひバラガラ河を渡り出發地より進行三十支里正午十二時西烏珠穆沁王府に達しブレンヌ村より來りし道案内者の報知により余等一行を出迎へたる王府役人の案内にて旗務公署に所屬せる蒙古包に入る午後五時挨拶のため扎蘭巴ートル君來訪せしを以て種々の會話を試みたり王爺は十數日前より阿巴噶大王旗に要務勞々ゴゴンに叩頭のため重要な役人連を引連れ赴きをれるも兩三日中には歸府の豫定なりと。

余等は扎蘭の骨折りにて明朝王府前なるハンベム廟の土造家屋に引移る事となれり。今朝ブレンヌ村にて見たる狩獵の際獵犬に使用するチャラ(頸輪)を次に圖示せん。

(毛金屬皮毛は白馬の鬃を紅く染めたるを用ふ)



(五) 西烏珠穆沁王府滞在

余は病氣の爲食事として日々液體のみを取りつゝ無理押しに調査旅行を繼續なしをりしに昨日當王府到着以來病勢益々險惡となり發熱、腸痛、血便の惡症を呈し兩便共に室内に於て用達する迄となり遂に空しく數日を當府蒙古包内に呻吟消光する事となれり今此の期間に於て見聞せる事又は感想等を記憶せる儘斷片的に左に記載する事とせん。

當王府附近の精査は近き將來に之が實行を期し詳細報告す可き豫定なり。

A、最も容體險惡なりし日

十九日夕刻より發熱烈しく腸部には一種云ふ可からざる不快を感じ夜に入りては心臓にも故障を覺れ呼吸大いに困難となり神經は愈與奮し時々刻々斷末魔の迫り來れるが如く自ら感ずるに至りしも同行井上君の携帶なしをりし顯草酸メントールエステルの數滴は大いに效を奏し幸ひにして此の苦痛より免るゝ事を得たりしも萬一の場合を覺悟し翌二十日大なる苦痛を忍び、余が故郷に余の無事息災を祈り居給ふ兩親と骨肉の妹、旅順民政部なる黑崎殖産課長、旭主計正雨氏に宛て重要事項の遺書を認め餘事は一行の井上君、本田君及余

の助手に使用せる蒙古人チョクトーに遺言す、此地は林西を北に去る三百有餘支里其間興安嶺の本脈東西に走る然も蒙古包内の地面に粗製の毛氈を敷きたるのみの惨たましき病床の上告ぐる者は半死の人萬感胸に迫りて言葉續かず聞く者亦語なく唯同情の涙を呑むあるのみ時々此の刹那思ひは遠く兩親と妹に走りて唯一目なりとも逢ひて別を告げ度しとの念頻りに胸を襲ふ。

B、旅行中止と決心す

林西出發以來病氣の容體により再三旅行を中止せんと思考せしことありしも何に大丈夫ならんと常に總てを善意に解釋し遂に決行せず斯くして當旅行の主要目的地タムスノール迄程遠からぬ當王府迄は漸くにして過ぎ付けたるも既述の容體にては到底實行覺束なく乍殘念タムス鹽湖調査は更に他日を期し當地より南下して林西より赤峰に到り同地日本赤十字社救療所に治療を受けることにせんと斷然決意し病勢の進行衰退は其の成行に任せたり。

C、滞在中の天候と氣温

月 日	天 候	最高温度	最低温度
十月十八日	晴天強西北風	四十五度	二十度

十月十九日	降雪	四十九度	十七度
十月二十日	晴天強北風	四十度	八度
十月二十一日	晴天強西北風	四十二度	十二度
十月二十二日	晴天強北風	四十三度	十五度
十月二十三日	曇天	二十度	二十度

D、王爺の優待

二十日旅行中の王爺は歸府せり而して余より若干の手土産を贈呈せしに返禮として二十一日、栗毛の駿馬一頭贈り來り且つ余は病氣のため王府前の廟に引移る事は出來得ざるため旗務公署の附近に熊々包を作らしめ余等一行の假寓に宛て呉れたり而して余は此際蒙古包の住宅として頗る輕便なるを知りしは右記余等の住む可き包は骨組及び之を覆ふ可き毛氈等兼て王府に準備なしありしと雖之が建築に要せし時間僅三時間を要せしのみなり尙王爺は余の病氣を喇嘛に祈禱せしめんと勸めしも余は其の厚意のみは之を誠實に感謝する事とし祈禱の形式は之を斷りたり此の外當王府滞在中王爺以下諸役人の至れり盡せるの優遇は余の迄各王府に於て嘗て経験せざる處なり。

1. 當王府より東蒙無限の財源たるタムス鹽湖迄は其距離約三百五十支里牛車にて六、七日行程を要し同湖採鹽者は一頭曳牛車各一臺に對し税金として銀三錢（相當の物貨にてよし）を納付せざる可からずと雖東西烏珠穆沁東西浩濟特旗民は之を納付するを要せず鹽湖は西烏珠穆沁、東浩濟特兩旗に所屬するものなりと。
2. 毎年夥しき鹽を産出するタムス鹽湖は所謂之れ天産無盡蔵の財源たり、故に再三蒙匪事件により掠奪を蒙り家畜數の如き大いに減少せるも旗民は幸ひに此天與の財源を頼み之れを採取し他旗に運び廢子又は粟等の穀類と交易を行ひをれり西烏珠穆沁は純牧地帯に屬し一粒の穀物をすら産出せず旗民は右採鹽と牧畜に従事し生活なしをれり。
3. 西烏珠穆沁旗に蒙古兵一千名を有し内四百名は王府に駐屯し外六百名は各要地に若干名宛配備なしをれり而して此の軍隊は範を民國にとり多倫より支那の喇叭卒を雇ひ來り之を教師として毎日喇叭の練習をなさしめをれり兵士には毎月一人に對し麥粉五十斤、羊一疋、茶若干を支給す。
4. 當王府には林西縣統領府に駐屯せる常統領配下馬隊の兵五名駐在なしをれり各員蒙語

に通じ王府より供給の蒙古包に住み時々英上當王府間を往復し聯絡を取りをれるものゝ如し。

5. 王府は北に山をひ負南方ハンベム廟に對し廟の西側には蒙古包の兵營連れり王府は煉瓦造り家屋及び比較的廣大なる蒙古包よりなれるも東蒙中最も富めりと聞ける當王府としては其建築壯大ならず。
6. 普通民戸は王府を東に去る二支里の地點北より南に流るボルギン河畔に散在し合計五十餘戸あり其の外同部落中二十有餘戸の支那行商人あり其商品及價格等は之迄旅行中調査せしものと大差なく彼等の根據地は林西六分、經棚二分、烏丹城、多倫諾爾各一分の割合なり。
7. 右記普通民の過半以上は民國二、五年蒙匪の亂に際し支蒙兩軍より家畜の掠奪を蒙り殆ど其の全部を失ひたる結果日々の食事にすら窮せる哀む可き徒にして王府は之が爲め本年一月より十月迄に馬二百頭を金に替へ貧民一般に之を施與せし事一度粟一斗宛一度五升宛二度都合四回の施與を行ひたる外現在にても種々の要件に成るべく彼等を使用し之に給食し以て餓死より免かれしめをれり。

8. 純蒙古地帯に入りてより即ち興安嶺の本脈を南より北に越えし以來蒙古既婚女を見る
其の頭髮一般に少し之れ髪のかき方と重量の頭飾りを使用する結果ならんと思はる。
9. 西烏珠穆沁旗に於ては一度妻を離別すれば男、女共に公然たる再婚出來ざる習慣あり
と耳にせり果して事實なるやは未だ審にせず。
10. 當王府に於ける鹽と糧食の交換率

小米子一斗に對し 鹽三斗半、迷子、谷子各一斗に對し鹽二斗。

東蒙古の經濟上に最も重大なる關係を有せるタムス鹽湖の狀況及び今尙純然たる蒙古固有の古風を存し比較的世人に照會しをられざる東、西烏珠穆沁、浩濟特の純蒙古地帯の風俗自然の景趣等は病氣全快の後必ず之が實地調査に従事し其の詳細を報告せん事を期しをれり。

六 西烏珠穆沁王府より林西に到る

十九日夜來險惡の兆候を示せし容態も數日の安靜加養により稍衰退せしが如ければ二十三日此の機を逸せず南下する事とせり然るに大板上以降數日間困難辛苦を共にしたる井上兄は余の極めて衰弱せるを氣使ひ自らも其の目的を此の地に捨て看病旁同行南下せんと言

葉を盡して獨行の不可なるを説かれしも余には誠實なる蒙古人助手の隨行するあり且つ余のために同兄等をして重大なる目的と希望を果たさしめざる事の余にとりて頗る心苦しき余自らも其の目的を達せずして中途より引返すことの如何に殘念なるかを充分味ひをれるを以て同君の友情に富める親切に斷然耳を貸さず遂に十月二十三日西烏珠穆沁王府に於て杖を分ち井上一行は北の方タムスノールに向ひ余は南下林西に赴く可く決す。

以下記述する沿道の概況は半死の病軀を林西迄運ばるゝ途中氣の向きたる際手帖に控へたるものなれば其の詳細を缺ぐや勿論なりと雖も皮相の見亦取る可きあり此んな事かと思ふ事も又見る人聞く人により或る種の參考となるは余の之迄再三再四實驗せる所なれば左に記載する事とせり此の沿道に就きて他日再調査の上詳報する處ある可し。

十月二十三日 曇天 溫度最高五十七度 最低二十度

今朝愈林西に向つて出發せんとす、當西烏珠穆沁王府より林西に通ずる東、西の二大道あり西道はホルト廟を經由し南に直行興安嶺を越え林西に到るものにして東道に比し近距離なりと雖も途中必ず興安嶺中に於て一夜露宿せざる可からず之れ余の病體に取り不可能の事に屬するを以て遂に迂路東道を進行する事に決す而して西道はタムス鹽湖より林西方面

に搬出する鹽の運送道路たり但し東道と雖も絶対に運鹽牛車の影を見ざる譯にはあらず唯後者が前者に比し大いに僅少なるのみなり。

午前九時出發平坦なる道路を東南行三十支里にして路側北に、三支里の地點にワズ廟を眺め更に進み十支里正午十二時半コリ村(包二〇、牛七)に著し朝食として牛乳を飲み休息午後一時半同村を後にし午前同様の平道を行く五十支里午後四時半右方に聳ゆる山上に王爺鄂博を見つゝバラカラ村(包四〇)に達し蒙古包に投宿す此附近糧食の缺乏せる結果一滴の牛乳粒の迷子と雖も決して之を粗末にせざるを目撃す。

十月二十四日 降雪 北風猛烈 温度最高四十八度 最低十五度

午前十時バラカラ村出發東南行二十支里ラステンゴロ村(包二〇、牛三〇)を經由し更に南行七十支里午後六時ディエン廟に著し大喇嘛の許に泊る當廟は北に山を控へ二座の廟よりなり廟に連り僧房二十餘戸を有せるも客冬英上常統領の配下に屬する馬隊警備のため來り駐屯し蒙古包の全部と煉瓦及土造家屋の木質部分の大半は之を燃料に使用する等の亂暴を働きたため其の節僧は四散し現在僅かに十餘名残れるのみ而して佛像も目欲しき道具と共に全部支那兵に掠奪せられ荒れ果て居るも外形のみは依然として壯大なる石造の廟より讀經の

聲を漏れ聞きつゝ長日月の旅行に加ふるに馬糧缺乏の爲め營養不良に陥れる余が馬車の轆馬が餘命幾何もあらざる衰弱の模様を眼前に思ひ浮かべ自己の病と比較し吁々生者必滅と默禱しつゝ床に就く。

當廟の西側に廣大なる樺木の森林あり西烏珠穆沁王の所領にして其の監視を當廟に託しをれり。

本日紛々たる降雪は四邊の展望を妨ぐ道路平坦なり。

十月二十五日 曇天 温度最高五十度 最低二十度

午前十時ディエン廟を發し東南行正午十二時行路を正南に轉せし頃より稍々爪先上りとなり刻々加はり來る多大の困難を侵し午後二時四十五分巴林烏珠穆沁兩旗の旗界たるホプト梁(此道に於ける興安嶺本脈の最高地點)の頂上に著すれば石を積み上げたる大鄂博あり之に鹽、粟、馬の尻毛等供へあり恐らく旅行者が一路平安と家畜の無事息災を祈りしものなる可く附近處々に燃火の跡を見るは之れ露宿者の炊事せしものなり此の山頂より南に流るゝ一小清流あり之に沿ひ或は縫ひ南下すれば巨岩奇石の間樺木、柏等の樹木を見る事往路に越わし興安嶺メールト梁附近に異ならず午後四時半此の梁を越れば左右路側に農

耕地を見同五時三十分ホブト村(三〇戸全部支那人にして)に著し朱君の支那式土造家屋に投じ久し振りに温かき炕の上に休み支那語にて會話せし時は恰も我が家に歸著せしが如き氣分になりたり然かも此處は興安の南麓恐る可きは習慣ならずや、今朱君により調査せし處を記述すれば、

當村は民國元年の移住に係り即年より開墾に従事したるも民國二、五年兩度の蒙匪事件に大なる損害打撃を蒙り神經過敏になり居る結果アグイ廟事件を聞知し風聲鶴唳早くも逃げ出せしものさへあり如斯狀態にて自然開墾も意の如くにならざる由。
農作物は小麦三分、蕎麥三分、蕎麥二分、糜子二分に當り本年收穫毎畝平均一斗餘(林西に使用せる官斗)にして四分作と稱す。

當村は林西縣の管轄に屬し小巴林王府迄の距離百二、三十支里。
本日行程七十五支里。

十月二十六日 晴天 温度最高五十一度 最低十八度
午前七時ホブト村發南北に開ける谷地の農耕地帯を南下す。

二〇支里邊垣(戸數二〇、支那人半二〇、馬二) 五支里大城子(戸數五、支那人半二〇、馬二) 二五支里五十家子(戸數三〇、内支那人半二〇、馬二)

〇蒙古人半二〇等の村落を通過し午前十一時英上(常統領の馬隊)に著し食事少憩。

英上地方農作物は小麦三分、糜子五分、蕎麥一分、谷子一分の割合に當り本秋收穫量毎畝平均一斗餘(官斗以下之に同じ)にして五分作なりと云へり。

地價開墾地にて毎畝大洋一元位。

當英上には烏丹城より來れる天幕生活の行商支那人呂某あり其の商ひをれる商品の價格を參考として次に記載せん。

品	目	單位	價	格	記	事
掛	麵	斤	小洋	一		
洋	火	包(十箇入)	銅元	九		
葉	草	斤	小洋	三		日本大阪大産社製印雙猿印
麻	油	同	同	三		
燒	酒	同	同	三		
粉	子	同	同	二		
月	餅	同	同	二		

備考 主として糧食と交易を行ひ糧食の評價は林西商務會の協定せしものによりと云ふ。
純蒙古地帯旅行調査日誌

午後二時出發 二〇支里トルタマチー村(戸數二五、支那人羊一)を經過し一〇支里トラールタマチー村(戸數一〇、支那人一)に著せしは午後五時三十分直ちに農戸に投宿す本日通過の道路極めて平坦なり。

十月二十七日 晴天 温度最高四十七度 最低十五度

今日は陰曆九月十二日なり思へば客年の昨日は官地、今日は林西に於て支蒙兩軍の衝突せる記念日なり。

午前九時トラールタマチー村を發し五支里ハトソグル村(包五、蒙古人牛六)五支里チヨルチン(包五、蒙古人牛一五)迄の途中に於て鞍馬に故障を生じたる結果漸くにして正午十二時チヨルチン村に到着し遂に之が手當をなし休養せしめんと今日は當地に泊る事としラハームー君の包に入る。

當村には常統領の馬隊二哨駐屯し西南に通せる谷地は西南百二十支里にして什八臺に達するを得。

當地蒙古人は半農半牧に従事し農作物は五十家子附近と同様なるも本年は同地に比し甚だ凶作なりと云ふ現今に於ける鹽の交換率は鹽二斗に對し糜子一斗、北一支里の地に民國二

支那軍の兵火に罹り烏有に歸せしチヨルチン廟の再建築準備中なるを見余は再度其厄を被るが如きことなきやを氣使ひたり當村は民國二年の亂に於て支那兵より全戸焼き盡され昨五年には蒙匪の殿軍が滞在する事三日馬三百、牛二百、羊三百餘頭を掠奪し去りしと云ふ。

十月二十八日 降雪 温度最高五十四度 最低二十一度

午前八時チヨルチン村を出發南行三十支里の途中公主嶺に附屬せる老榆樹の森林を望見しつゝ公主嶺(包五、蒙古人公主嶺の監視)を通過し更に二十支里を進み正午十二時三十分カンガル(戸數二〇、支那人馬三)に到着し朝食を済すカンガルには馬隊四哨駐屯し小雜貨舖一戸あり。

午後二時半出發一〇支里官地(戸數三〇、支那人牛六〇)一五支里ポリコントン(戸數三〇支那人、有名なり)一〇支里ポリコー(支那人)に到着せしは午後六時降雪紛々颯々柳絮の飛ぶに等しく暮色は蒼然として四邊の風物愈情趣を加ふるの時なりき。

當地附近に於ける農作物は谷子六分、小麦二分、蕎麥一分、豌豆一分今年六分作にして毎畝平均收穫高二斗半なりと云ふ地味佳良なるを知る可し。

カンガル附近に於ては農耕地を見ず空しく荒廢のまゝ打捨てあるは地味不良の結果ならん

十月二十九日 晴天 温度最高五十五度 最低十九度

午前九時ボリーコーを發し西南行一五支里小銀河串(戸數三、林西米司、令官の農務あり)一二支里東不探五支里
ソブタイ廟を過ぎ更に西行八支里此の途中四箇處に緩慢なる梁を越ゆ午後一時漸くにして
林西東門に入り色褪せたる日章旗を押し立て進めば林西の街恰も余を待てるものゝ如し。
而して余は東生泉燒鍋内なる余の事務所に到るや否や直ちに西烏珠穆沁王府に於て病勢險
惡なりし際之れを携帶せざりしことを千萬後悔せし余が父と母と妹の寫眞を取り出だせり。

掬鹿海龍方面に於ける邦人發展狀況

(大正六年十二月十日報告)

海龍城駐在 電話 古 曳 好

目次

- 第一、邦人發展狀況
- (一) 戸口
- (二) 職業
- (三) 資本及經營狀況
- 第二、有利なる事業
- 第三、邦人の企業に適する事業
- 第四、邦人發展上注意すべき事項

第一、邦人發展狀況

其一、戸口

大正六年十月末日現在戸數及び人口左の如し。

所在地	戸數			所在地	數戸		
	男	女	計		男	女	計
西豐縣縣城	二九	三六	三八	海龍縣縣城	一〇	一三	二四
計			七四	計			二四

掬鹿海龍方面に於ける邦人發展狀況

100

同	同	同	東豐縣縣城	合	同	同	同	同	同	同	西安縣縣城	合	同	同	同	西豐縣平崗
楊木林子	黃泥河子	大沙河子		計	老虎砬	遼河源	大夾信子	二道河子	半截河			計	高家店	野鷄背	冷水泉子	高力木子
二	一	二	八	一九	一	一	一	一	一	一四		三六	一	一	一	三
二	一	二	九	三〇	一	一	二	三	四	一九		四四	一	一	三	三
一	一	一	五	二〇	一	一	一	一	一	一七		四五	二	一	一	三
三	一	三	一四	五〇	一	二	三	四	四	三六		八九	二	一	四	六
合	同	同	同	同	同	同	柳河縣縣城	合	同	同	輝南縣縣城	合	同	同	同	海龍縣朝陽鎮
計	亨通山子	南山城子	通溝	勝水河子	孤山子	樣子哨		計	杉松崗	樓街		計	土口子	六八石	白銀河	山城子
一八	二	二	一	一	三	五	四	七	二	一	四	三四	一	二	二	二
二四	三	三	一	一	四	六	七	六	二	一	三	四五	一	二	二	一〇
七	一	一	一	二	二	二		一	一	一		三〇	一	一	一	五
三一	二	三	一	二	六	八	九	七	二	一	四	七五	一	二	三	一五

備考 藝酌婦、被服人及び同居者は人口にのみ算入し戸數に算入せず

其二、職業

職業を縣別に示せば左の如し、賣商及び賣藥商は兼業するもの多ければ本表には之を區別せず。

業別	縣別
官吏	西豐縣
會社員	西安縣
醫師	東豐縣
質賣藥商	海龍縣
雜貨商	輝南縣
穀物仲買商	柳河縣
	磐石縣

撫鹿海龍方面に於ける邦人發展狀況

一〇一

て廣く知らるゝ所なるが該炭坑の附近に鐵礦あり現今株式會社を設立し土法に依り僅かに採掘すれども利益なき爲め株主中には日本人と合辦を希望し居るものもあり云ふ該鐵は純分多く鐵脈も甚だ長しと云はる若し専門家が調査すれば或は炭坑の方よりも有望なるやも知るべからず然し是も鐵道開通を俟たざるべからず。

三、電燈事業 撫鹿、大疙疽、山城子及び朝陽鎮は孰れも戸數二千戸内外あれば電燈事業を創むるは有望ならむ。

四、銀行業 現今に於ては現金輸送上の不便等に由り今俄かに銀行を設立するは困難なれども將來邦人の發展すると共に銀行設立の必要なると同時に有望なるは言を俟たず。

五、大豆の買出殊に先物買 邦人は匪賊の危険を虞るゝと奥地の事情に通ぜざる爲め二三者を除き奥地には買出に行くものなく大豆は多く支那商人に由り鐵道沿線に出さるゝが夏季農家に資金を要するときは一斗七八十錢にて先物を買はる收穫時期に於て一圓十錢(例年の相場)とすれば約六七割にて買はる即ち半年間に三四割の利廻りとなり最も有利なるものなり。

六、精米業 從來邦人は大豆にのみ著眼し雜穀は多く看過せらる無論大豆は產物の大宗な

るが當地方一帶には又米を産す就中西豐縣及び柳河縣に最も多く殊に西豐縣の產米は朝鮮米に比し餘り劣らず故に適當なる處に精米工場を設け米を販運するも有望ならむ。

七、醬油醸造業 支那人は近來日本醬油の長所を知り漸次使用し來りたれば撫鹿、山城子海龍又は朝陽鎮に於て醬油を醸造販賣するは有望ならむ。

八、諸礦業 當地方は最も鐵産に富み石炭、鐵、銅、金、鉛等各種の礦物を産す専門家が精査すれば中には有望なるものあらむ。

第三、邦人の企業に適する事業

支那人は多く薄利多賣主義にして生産費も低廉なれば支那人と競争することは困難なり故に雜貨品の輸入販賣の如きは仕入れ等に於て邦人に有利なる條件あるにあらざれば支那人に對抗し難し故に大體より言へば邦人は須らく支那人の企及し能はざる大資本を要する事業又は新智識を要する事業を興すを以て可とすと思ふ。

第四、邦人發展上注意すべき事項

- 一、交通 現今交通頗る不便なり運賃の不廉は當地方に於て企業せんとするものと最も注意せざるべからざる所なり鐵道の敷設は實に今日の急務となす。
- 二、金融及び通貨 現今各地に支那の銀行は存すれども邦人の利用するに便ならず又地方の通貨(紙幣)は不統一且つ偽造多く邦人の迷惑甚し是亦注意せざるべからざる例なり交通機關の整備に次ぎて重要なものは支那幣制の整理と我金融機關の設立にあり。
- 三、法制 支那の法律は或は新法令に依り或は從來の慣習に依り將た又地方に依り異り尙に紛糾錯雜すれば一法律問題に遭遇する毎に當事者は甚だ迷ふ與地に於て事業を爲さむとするものは豫め先づ地方の法律制度を研究し著手後不測の損害を招かざる様注意せざるべからざるは無論なるが吾人は支那法制の劃一明晰を希望して止まず。

張家灣邦人發展狀況

(大正六年十二月一日報告)

扶餘駐在 囑託 廣 本 光 治

一、概況

張家灣は東清南部線中最も繁華なる都市として管に將來有望なる地點なるのみならず長春を距る鐵路僅に五十哩にして交通至便なるに拘はらず邦人の此地に發展せるもの未だ寥々たるものにして合計百餘名に過ぎず而も資產業務狀態等孰れも尙は貧弱にて漸く主たるものの特産物商五、運送業一、質舖三あるのみ内質舖は特産物商の兼業に係るもの二戸あり其他は殆ど賣藥商若くは料理店にして基礎堅實なるもの少し然れども漸次他地方より有力者此地に發展し來らんとする傾向あり既住者に於ても亦大に奮勵し將來面目を改善し健全なる發展を遂げんと期せるの顯著なるを認めらる今後日露協約の結果東清南部線吾が有に移らんか邦人の發展目醒しきものあるは想像に難からず。

二、戸口職業

張家灣邦人發展狀況

大正六年十一月現在邦人戸口職業別下の如し。

種別	戸數		種別	戸數	
	男	女		男	女
官吏	一	二	賣藥	一	一
雜穀	一	一	大工	一	一
運送	一	一	宿業	一	一
質屋	一	一	雜業	一	一
料理	一	一	計	一	一
婦店	一	一			
計	一	一			

備考 前表中戸數合計一の差違あるは宿屋業兼業なるが爲なりとす。

三、特産物商

目下當地に於て特産物商を營めるもの五戸あり何れも規模未だ大ならず從來主として當地糧棧に止宿し糧棧の手を経て穀物を買付け居りしが本年冬季より内義興東(秋元勝治氏)東興棧(寺中楠次氏)昌圖公司(谷口嘉作氏)の三戸は各糧棧を開設し直接馬車物の買付けを爲す由邦人發展上慶すべく將來相當の効果を擧ぐるならんと期待せらる。各戸の資本金等判

明せず。

四、運送業

運送業は山口公司の支店一あるのみにして當戸は豫て資金、信用共に厚く本年より驛構内出廻特産物に對し荷積證券を發行し是に依り各商舖の資金融通の便を計ると同時に相當の手数料を徴することとし更に本年新設の長春運輸株式會社と提携し荷馬車輸送をも開始する計畫あり前者は金融機關絶無の當地に於ては頗る一般に歡迎さるゝ處にして隨て極めて有利の事業と謂ふべく後者も亦東清鐵道輸送力激減の今日有望有利なるは論を俟たず將來の發展大ならんと認めらる尙前記證券發行手数料は未だ確定せざるも一車(露貨車)に對し小洋五元位ならんと云ふ。

五、質屋業

當地は支那人經營の質屋なく三戸の質屋は悉く邦人の出資經營に係り獨占的狀態にあるを以て成績頗る良好にして多大の利益を收めつゝあるものと如く利率は月一割流質期限は三

箇月にて吾が警察取締規則に準據し經營し居れり入質者は悉く支那人にして貨幣は小洋錢を標準とし吉林官帖を貸出し居れり放資の餘地は尙十分あるも何れも資金豊富ならざる爲發展を阻害されつゝあるものゝ如し各質屋商號、經營者姓名並貸出金額下の如し。

大 豐 當	首 藤 利 七	約小洋千五百元
益 盛 當	秋 元 隆 治	約小洋三千元
春 豐 當	寺 田 嘉 作	約小洋一千元

尙前記大豐當は質屋營業の傍ら放印子と稱し支那妓館又は小商人等に對し合計約二千五百餘元小口に信用日歩利貸付を爲し多大の收益を收め居れり利廻は一箇月一割乃至二割に相當する由は一見頗る危険なる放資の如きも事實に於ては殆ど危険なく大部分元利共同收されつゝあり唯本業は所謂高利貸にて支那人間に於ても極めて劣等なる業務と見做し居るを以て一般の氣受は宜しからず又其利率頗る高きが爲被放資者は屢々元利の支拂を遅延又は避忍せんとすることあり故に放資者は常に此等に對し相當の權威を有し居るものにして始めて十分の成績を擧げ得るものとす此點に就きては邦人は支那人に對し無形の權威を有するを以て多大の便宜ありと云ふ。

六、賣藥業

本業者は合計七戸あり悉く薄資者にして主として禁制品嗎啡及阿片等を密賣せるものゝ如く支那人側よりも甚だしく懸望されつゝあり邦人の體面を毀損すること大なり然れども官憲の取締嚴重なると機運の進展に連れ何時迄も斯る浮浪的業務に従事するを得ざるものと自覺し各自發奮他に適當の業務を營まんと計畫せる傾向あり頗る慶すべきことなるも元より薄資にして而く容易に適當の業務も發見されず且つ多年斯る一攫千金の業務に従事せし情性は決然之を廢し難く尙逡巡舊體を持續し居れり。

七、料理店

本業者五戸あり是れ亦薄資者多く可憐なる妓女數名を擁し大部分支那人を顧客として狹隘不潔なる支那家屋に營業しつゝあり未だ本業者にして多くの資財を造り居るものなし。

八、其他の業務

其他の業務としては目下日本食料雜貨商を經營せんとせるもの一あり將來日本人の發展と

共に繁榮すべきも目下の處收支相償はざるものと如し殘餘の在住者は殆ど無職者にあらざれば支那人の妾となれる婦女等なりとす。

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展狀況

(大正六年十二月五日報告)

赤峰駐在 堀訖 三 原作

目次

- 一、緒言
- 二、調査區域内に於ける邦人發展狀況
- 三、經營狀況
- 四、赤峰朝陽附近一般産業狀況
- イ、赤峰を中心とする産業
- ロ、朝陽其他を中心とする地方
- 五、邦人の採るべき事業
- 六、邦人發展上注意すべき事項
- 七、結論

一、緒言

熱河蒙古特に赤峰方面に邦人の居住せしは極めて最近のことに屬し其以前は單に旅行者又は實業視察員により調査研究せられし事項の僅に世に紹介せられつゝありしに止るも翻て其間外國商店の活躍状況を見るに東蒙古特産物たる羊毛甘草及皮類を初め輸入諸雜貨は其大部分彼等の掌中に歸し現在東蒙各都市にありて彼等の分行を見ざるなく我の調査豫備時

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展狀況

代に彼は既に確乎不拔の地盤を開拓せるものと稱すべきなり。
現在外國商店の手により輸出せられつゝある毛皮類は大約一箇年羊毛百四十萬斤、羊絨五十萬斤、駝絨十萬斤、羊皮一萬枚、甘草(昨年買附高)百餘萬斤(乾)に達し其他石油、煙草、綿絲布、陶磁器、諸雜貨の大半は彼等の獨占するところたるに反し邦人の經營に成るものは先に林西に東生泉燒鍋、烏丹城に永和洋行あり近く盛進商行、滿蒙興業會社の兩支店赤峰に設置せられたるに止り後節説くところの邦人發展状況は唯特種賣藥商の發展状況を語るに過ぎずして著實なる企業家の寥寥數ふるに足らざるは邦家のため甚だ遺憾とするところなり、願ふに熱河蒙古は支那中京に近く往昔より東蒙古中最も重要視せられたるところにして天惠の饒山に富み地味稍々鄭家屯、白音他拉方面に劣るゝ雖牧畜業盛にして毛皮の產多く甘草亦無盡と稱すべく是が中心地點たる赤峰は二百餘年來東部蒙古各都市百貨需要供給の地として商業殷盛を極め現に中外通商地として開放せられ我が領事館の設置を見たる今日邦人たるもの一日も速に之が經營に従事し後來臍を噬むの悔を残さざらんことを力むべきなり。今熱河蒙古産業状況を述ぶるに當り余未だ調査時日淺く且踏査審からざれば從て赤峰附近に詳に綏東、阜新、朝陽、建昌に疎なるは甚だ遺憾とするところなり、特に赤峰

に關しては赤峰事情の復命書あり又一般産業状況及邦人の探るべき事業に就きては本春既に報告せるところなるを以て茲には單に邦人發展状況其他二三企業上注意すべき事項に關し私見を述べんとす。

一、調査區域内に於ける邦人發展状況

邦人賣藥商の山海關、綏中、錦州を根據地として平泉、凌源、朝陽の各管内に居住せしは二三年前のことに屬するも是とて僻陬の地に限り口に堂々一等國民を唱ふるも僅に旅館の一部を借受け陰に人道上恥づべき特種賣藥を以て生計を立てつゝありしものにして現在各縣治所在地にありては一切彼等の居を構ふるを許さず之がため著實なる企業家の蒙る打撃鮮少なからざるは勿論邦人發展上一大害毒を残したるものと稱すべきなり。

赤峰は民國二年中外通商地として開放せられたるも邦人の初めて居住せしは昨年五月以降なり原と多少支那官憲の壓迫を蒙りたりと聞くも他處に比し最も順當に發達せるものにして殊に本年二月我領事館の開設となり商埠地の竣工を見て以來邦人の當地に來るもの踵を接し現在既に六十名を過ぐるに至れり。

赤峰以北は林西、烏丹城に一二邦人經營の事業を見たることありと雖爾來邦人の入り來るものなかりしが本年七月以降烏丹城を根據地として廣徳公(二名)土城子(一名)林西(三名)經棚(三名)に至るまで邦人の居住するを見るに至れり。

左に本年五月末及十月末在留邦人員表(赤峰領事館調)を示せば、

イ、赤峰市

職業別	十月		五月	
	戸數	計員	戸數	計員
領事館	二	二	二	二
警察署	一	一	一	一
陸軍武官	一	一	一	一
通譯	一	一	一	一
醫師	一	一	一	一
看護婦	一	一	一	一
派遣學生	一	一	一	一
雜貨商	一	一	一	一
計	九	九	九	九
男	八	八	八	八
女	一	一	一	一

入商細工	十月		五月	
	戸數	計員	戸數	計員
質屋	一	一	一	一
旅館	一	一	一	一
賣藥商	一	一	一	一
計	三	三	三	三
男	三	三	三	三
女	一	一	一	一

ロ、赤峰市以外在留邦人賣藥商人員表

赤峰縣烏丹城	十月		五月	
	戸數	計員	戸數	計員
平泉縣西橋頭	二	二	二	二
凌源縣塔子溝	三	三	三	三
同八家子	一	一	一	一
同公營子	一	一	一	一
同忙牛營子	一	一	一	一
同瓦房	一	一	一	一
同湯神廟	一	一	一	一
同山嘴子	一	一	一	一
計	一三	一三	一三	一三
男	一三	一三	一三	一三
女	一	一	一	一

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展状況

二一八

[illegible]

備考 右表の外に出なき賢樂蘭の多數入込み居るは事實にして、凌源、朝陽各管内に居住せるあり。

賣藥行商の經營狀況は説述するの値なく一日も早く正業に復歸すべきを切望して止まざるどころなりとす。

是等行商人を除きたる以外は赤峰に盛進商行及滿蒙興業會社の支店其他二三あるのみ。
盛進商行は本年六月末三道街中和店內に支店を開設し卸小賣を兼ね一箇月賣上一千餘元に
上りつゝあり商品は主として石油、燐寸、砂糖、煙草、布疋其他日本諸雜貨に過ぎず、滿
蒙興業會社は其前身を大和洋行と稱し昨年十月中川氏の一行來赤し邦貨の試賣を行ひ傍ら
甘草エツキス製造に關し専ら奔走中なりしが本年九月遂に株式會社の設定を見、目下土地
買收工場建設準備中なり。

其他赤十字社救療所は四道街にあり専ら施療を行ひ質屋業は比較的金利の低き當地にありては未だ有望なる事業と見る能はず入齒細工は所謂羊頭を掲げて狗肉を賣るの類に非るか要之現在赤峰附近邦人約九十名に垂んとするも官公衙員及二三商戸を除けば悉く賣藥行商

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展狀況

人にして邦人發展状況として筆するの餘りに價值なきを歎するものなり。

四、赤峰朝陽附近一般産業状況

赤峰事情竝に「邦人發展に關する私見」參照

1、赤峰を中心とする産業

赤峰は熱河蒙古中樞四通八達の地に位し二百餘年來百貨需要供給地として發達し來りたるものにして輸入雜貨は多く之を天津、錦州に仰ぎて毛皮を給し其間朝陽、凌源、平泉、熱河の各地を含みて穀類、麥粉及麻油等の食料品を給し多倫、烏丹城、經棚、林西を包容して遠く烏珠穆沁に至り所要布疋雜貨の大部分を給して更に純遊牧地帯に送致し畜類、毛皮、穀類の供給を仰ぎつゝあり。

土産品を分ちて農産物、畜産物及製造工業品等とす主なる農産物の平年に於ける集散概數を示せば。

小麥	五十四萬石 (圍場、土城子附近)
粟	二十一萬石 (赤峰の西、鍋路臺河支流域)

高粱	二萬七千石 (同)
大麻子	十萬石 (赤峰附近)
小麻子	十三萬石 (同)
瓜子	五萬石 (同)
葉煙草	七八十萬斤 (同)
麻	四十萬斤 (同)

備考 括弧内は主なる産地名とす。

而して之等穀類は本街(約九萬石)及附近村落に消費せらるゝものゝ外は熱河境内に、小麥及麥粉は凌源、朝陽方面に、葉煙草は蒙古地帯に、麻は錦州に輸出せらる。

畜産物は更に分ちて畜類及毛皮とす。

畜類の一箇年集散概數を示せば

馬	三千四百百頭 (奉天直隸に)
牛	四千餘頭 (滿洲方面に)
豚	一萬五六千頭 (錦州方面に)

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展状況

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展状況

羊 一萬四五千頭 (京津地方に)

備考 括弧内は主なる輸出地名をさす。

毛皮一箇年集散概数は

羊・毛(淨貨)	百五十萬斤	(天津錦州に)
羊 絨	三十萬斤	(同)
駝 毛	四萬斤	(天津に)
豚 毛	十四萬斤	(內含蘇州四萬斤、直隸河頭縣)
馬 尾	七萬斤	(內含馬尾二萬斤、天津錦州)
羊 皮	五十萬枚	(綿羊皮は大部分當地に山羊皮は天津錦州に輸出)
牛 皮	十萬枚	(錦州經由滿洲に)
馬 皮	七萬枚	(天津に)
狗皮猫皮	各二萬枚	(一部當地に一部錦州に)

備考 括弧内は主なる輸出地名をさす。

藥草中主なるものは甘草にして一箇年二百萬斤(乾)に達し多く產地より直接西海口、小庫

倫、奉天等の需要市場に送らる。

蒙古鹽は西烏珠穆沁、タブスノールに産し赤峰一箇年輸入高約四百五十萬斤に達し老哈河以北の各地に供給さる。

各種製造工業は悉く土法により見るべきものなしと雖も工業原料は前述の如く何れも豊富にして之が原動力たる石炭は赤峰附近二三良質の炭山あるあれば速に斯業専門家の實地視察の上企業せられんことを切望す。

左に二三赤峰に於ける工業につき説述せん、

△燒鍋は現在十七戸三十七班市外に約十戸あり一箇年釀造高四百萬斤に達し其半は烏丹城林西、經棚其他に輸出さる。

△磨房は大小百五十戸あり燒酎釀造業と共に當地製造業の大宗となすべきものなるも多く燒鍋又は糧店の副業たり麥粉の一箇年生産額二百五十萬斤に達するも附近農家の副業として製粉業盛なるを以て遠く遼源、朝陽方面に輸出せらるゝ額鮮少なからず。

△油房は現在七戸あり輸出先は北京及朝陽方面とす。

△毡子舖は六戸あり一箇年所要原料毛絨十萬斤にして大小約一萬枚を製す。

赤峰朝陽方面に於ける邦人發展状況

其他製蠟業、染房、製紙、製革等あるも特記するべきものなし。
 〇、朝陽其他を中心とする地方

朝陽は乾隆三十九年の縣治設置に係り赤峰に次ぐ商業殷盛の地たり唯當地の赤峰に及ばざるは廣大なる輿地を控ふるに非ず又附近物産は直接錦州、西海口に輸出せらるゝもの多く輸入品亦直接兩地と取引行はるゝに依るか。

管内は地味一般に良好にして沙地少なく高粱、粟、豆類、蕎麥等に適し毎年錦州方面に輸出さるゝ外西海口經由山東方面に輸出さるゝ額少からず此外麻、棉花、煙草の産あり棉花は赤峰、林西、經棚等北方各都市に輸送さる朝陽管内漢人の移住と共に牧畜業漸次衰頹に向ひ概ね農業を事とするに至りたるを以て畜産物亦北方都市に及ばず製造工業としては燒鍋の七戸其他小規模の油房ありて附近の需要を充たしつゝあり、要するに朝陽、凌源方面は漸次北方諸都市の發達に連れ該市一部の繁榮を奪はれ且附近各部落は各々開市日を定め直接之等市場に百貨の供給を仰がざるに至りたるを以て現在に於ては農産物並に少額の皮毛集散市場たるに止り規模宏大なる店舗は唯往昔繁榮の面影を偲ぶに足るのみ。
 綏東、阜新亦往時殷盛を極め蒙古貿易市場として朝陽、義州と並び稱せられたるも開魯、

洮南、林西の發達と共に商業範圍を奪はれ今は唯々一の地方的市場として知らるゝのみ。
 是等諸都市に關しては更に調査の上説くところあるべし。

五、邦人の探るべき事業

熱河蒙古は天恵の鑛山に富むと雖未だ金及石炭の外探掘せられつゝあるを聞かず而して石炭は交通不便なるがため唯附近部落燃料の不足を補ひ金坑は建平、朝陽及承德縣に現に支那人の稼業中に屬するもの二三あるも探掘の法宜しきを得ず天然の富庫は空しく地下に埋没せられたり其外銀、銅、鐵、鉛、石棉、硝石等諸所に散在すと雖交通の不便は是が範圍を局限せられ探掘の法未だ進歩せざるは斯業者をして著手するを躊躇せしめ現に世上に知らるゝものは其中一二に過ぎずされば更に調査の歩を進め交通の便を計り探掘の法を改良せば意想外の發見あること疑を容れざるなり。

熱河蒙古各都市の内中外通商地として開放せられたるは唯赤峰あるのみと雖今旅行中の經驗に徴するに平泉、凌源、朝陽、圍場等何等邦人の居住に對し支那官憲の壓迫を聞かず現に朝陽は各旅行者により最も排日思想旺盛にして邦人の居住するを許さずと目されたる地

なるも是れ特種實業業者に對する官憲の妨壓手段に止り著實なる事業家は却て之を歓迎し現在一邦人齒科醫は既に滞在三箇月に及び一日と官商の信用を得今や一二合辦事業の計畫をも勧誘せられつゝありと、凌源、平泉亦然らん。

途上の支那人亦邦人を一瞥して特種業者として認りつゝある現況は是れ果して誰が罪を歎すべき限ならずや。

赤峰及其附近の産業の概況は前述せるが如し之等各種特産物を如何にして輸出すべきや是れ邦人の第一に考察すべき事項たり六百支里の道は山岳重疊、河川概ね橋梁なく車輛によるも猶七八日の長時日を要す物資の供給亦容易ならず吾人錦赤鐵道の何時計畫竣成すべきや未だ是を知らずと雖邦人の該方面に企業せんとせば一層の努力を要すべきや明なり。

イ、毛皮類 現在邦人の是等買出に従事するものなきも所謂青田買酌の方法により原産地に到り之を收買するを得ば意外の利あるを疑はず現に外國商店の分行は一部當地皮店にありて收買しつゝあるも更に奥地深く之が買出に従事しつゝあり。

ロ、甘草 之が買出に従事するものは多く朝陽附近の草撥子又は原産地に於ける大商舖なるも前者は多く現金買買によるも後者は雜貨代金として之を受取り又は秋收の時穀

物を買附け之を以て春夏採掘時期に甘草と交換しつゝあり若し穀物によるとせば穀物及甘草の賣買により二重收得あり將來邦人の勢力扶植上看過すべからざるところなりとす。

ハ、羊毛甘草の加工 かゝる交通不便の地より特産物を輸出せんとせば運賃の輕減を計らざるべからず若し羊毛を洗滌し甘草をエツキスとせば前者約三分一後者約四分三の運賃を減少し得べし甘草エツキス製造は既に滿蒙興業會社の計畫準備中に係るところたり。

ニ、鞣皮及製絨業 鞣皮は主として土法による羊皮の鞣しにして製絨は數物、靴下の製造たり是を新式の鞣皮法により又は製絨機械によるとせば現在の需要を充たす外下等の支那人向皮革をも製し其他諸種の綴通、下著類を製造輸出し得るならん。

ホ、獸骨獸皮の利用 豚羊の獸骨は路傍に放棄して顧みられず屑皮は僅に二三の膠製造に使用せられつゝあり現在膠一箇年三萬斤の製造高あり市價毎斤六百文(銅貨三十仙)と稱す、若し之に骨炭を使用し副産物を有利に得ることば趣味ある事業たり。

ヘ、麻油 赤峰附近麻油の産少からず是より卑麻子油を製出するも有望ならんか。

ト、園場の藍 熱河蒙古に供給せらるる藍は悉く赤峰の西二百支里西園場に仰ぐ之を藍丸とし海外に輸出するを得ば染料騰貴の今日亦國產增收の一ならんか。

チ、黒水附近の硝石 赤峰の南百支里老哈河流域に一箇年約三萬斤の硝石を産す或は精製品の輸出は困難ならんとするも粗製品を輸出し精製販賣するも亦可なり。

リ、製粉業 赤峰附近小麦の産あり且小麦粉は支那人の常食品たれば赤峰に機械製粉を企畫するも有利ならん然れども現在農家の副業として磨房の各所にあるあれば餘程の調査成算あるを要す。

ス、其他新聞經營 及日蒙支の學校を興し世界の文物を紹介し相互の制度、風俗、言語を研究するは邦人發展上最も注意すべきところなりとす。

以上は單に秩序なく列記したるものなるが小規模の工業は動力として電力を使用するの有利なるあれば或は電燈公司設立後ならざれば著手するを得ざるものあり而して電燈公司の計畫亦先年邦人の企畫せしところなるも遂に支那官憲の妨害するところとなり現在支那側に於て機械購入準備中なりと稱するも何時洋燈を撤するを得るや疑はし。

六、邦人發展上注意すべき事項

本邦貨物を東蒙各都市に輸送するに當り道路險惡にして荷馬車の交通最も困難なれば駄馬に依らざるべからず而して赤峰に至るには少くも半箇月の長時日を要するを以て或は荷物の現地に達せざるに先ち相場の変動を見ることなきに非ず是等に關しては輸出入業者共特に注意するを要す取引は殆ど現物賣買にして先物の契約をなすこと稀なれば相當の在荷を必要とするも倉庫業者なければ各自倉庫を有せざるべからず支拂は多く節季拂及鑑期拂によるを以て資金の回收に長時日を要し且つ通貨は所謂帖子(信用ある商家の發行に係る約束手形の如きもの)を本位とするの結果硬貨を得るに困難にして加之金融機關完備せざれば爲替關係亦不便を感ずされば該方面に發展せんとせば必ず輸出入兩者を兼ね輸入雜貨は單に店舗を飾りて支那人の信用を繼ぐの具に供し該品賣上代金を以て滿蒙特產物を購入し輸出せば硬貨を得るの不便を除き重て資金の活用を見るに至るべし。

七、結論

東部蒙古中熱河蒙古は交通不便なるため地味比較的良好にして我鐵道沿線に近き東部地方に比し邦人の發展稍々遅れたるの感なきに非ず然れども天然の礦物豊富にして其大部分は未だ地下に埋没し牧畜業盛にして之を利用加工するの途開けざるも將來布設さるべき蒙古鐵道は必ず熱河蒙古各都市を聯結するの運命にあるを以て著實なる企業家の益々發展し邦家勢力扶植に移められんことを切望して止まず。

林西經棚方面に於ける邦人發展狀況

林西駐在 慶託 大神 正 節

目次

- 一、現在邦人發展狀況
- 二、林西經棚地方に於ける將來有利の企業
概論
 - A. 實商及兩營店
 - B. 燒酒釀造業
 - C. 雜貨商
 - D. 製粉業と器械製造業
 - E. 農業と牧畜
- 三、邦人の企業に適する事業
- 四、將來林西經棚方面に於ける邦人發展上注意すべき事項
 - A. 林西に邦人醫院の設置の急
 - B. 爲替機關の至急設置

一、現在邦人發展狀況

余の調査區域内に於ける居留邦人は本年八月渡來せし山崎茂を最初とし現在僅に次記六名
林西經棚方面に於ける邦人發展狀況

を數ふるのみ今左に其の職業、戸數、人口等を表示すれば

一三三

居留地地名	戸數	人口	職業	資本金	姓名
林西	—	男 男 女 男 男	藥種商	三千圓	山崎 小笠原 常吉 茂
同 經棚	—	—	同	五百圓	小笠原 内藤 大川 赤峰 特永 洋行 出張員 文 基
同 同	—	男 男	同	五百圓	阿多 崎
經棚縣土城子	—	同	同	三百圓	山崎 文 基

藥種商と稱するも全部例の特種藥販賣業者のみにして山崎茂が商品を直接奉天より仕入れなしをれるの外は悉く赤峰なる邦人同業者より其の供給を仰ぎをれる者のみにして彼等の全部各相當の利益を揚げをれるものゝ如し。

余は此の特種賣藥商なるものゝ人道或は法規上よりの議論は暫く此處に之を避け唯彼等の異口同音に目的を達するに手段を選ばずと自稱せるが如く寸刻も速に其の目的を達し改むるに憚る事無く堅實なる事業に著手せんことを只管希望するものなり。

二、林西、經棚地方に於ける將來有利の企業

概論

余が調査區域内に於ける市場林西及び經棚は漢人侵蒙の最先鋒地と稱せらるゝが如く開蒙地に於ける市場として最も前線に位し兩市場共に北純蒙古地帯と近接し就中一時蒙地取引の旺盛を極めし經棚の如きも地理上の關係より遂に年と共に其の商權を林西に奪はれ不日北方の秩序回復すると共に著しき商況の發展を期し得べき總ての資格を具備せる林西に對し唯克什克騰及近接せる錫林郭勒盟の一部たる浩濟特を商業區域とする所謂地方的市場として僅に現狀を維持なし得べく恰も東翁牛特に於ける烏丹城市場に彷彿たるの情況にして經棚と云ひ林西と稱するも經濟界殊に製造工業と密接の關係を有する事魚の水に於けるが如き石炭の供給を受けんとするも品質極て劣惡なる赤峰の東天寶山産亦是土城子西方五十支里トントルクエント(現在小規模の採掘に従事し年産三萬斤位産を使用せざる可からざる不利の立場にあれば電燈、機械製粉等の如き當然有望の企業其の他多量の石炭を要する

工業は將來鐵道の開通を待ち企業解決するの外良策なかる可く次に現勢のまゝ實行なし得べき比較的有利なる事業に就きA. B. C. 3項を分ち次に記載せん但し林西、經棚事情に詳細記述せるが如く新開地の常規として專業に従事するは極めて少なく運用資金の關係又は事業開散繁忙の機を鹽梅し必ず二、三の副業を兼營なしをれるは後方市場たる赤峰、烏丹城方面に於ても同様にして例へば雜貨舖を主業とせる店舗が獸毛皮穀類の買入販賣を行ひ亦是製粉に従事し製麵を兼ねをれるが如きあり其の雜貨舖と稱するも綿絲布、其他綿製品類、食料品、金物類、紙類、化粧品一式、荒物、書籍、文房具、煙草等の諸雜貨に互りて販賣するあり雖然として其の營業範圍の領域を知るに苦しむの營業振なり。

A. 質商及び兩替店

七千有餘の人口に加ふるに四千五百の軍人が駐屯せる林西市場に於て大正五年正月初めて開設せられたる熱河官銀號分號の外質商は云ふに及ばず一戸の兩替店すらなく所謂一流の商舖中其の若干が右官銀號を利用せる外二流以下の商徒軍人の總て近郷の農徒等は一般に普及し現下の民情に適切なる金融機關として質商の出現を極力希望しつゝあれば當業は將來最も有利有望の企業に數ふるを得べく亦直に經棚市場に之を應用するを得可し。

或は折角歩一步を進め文明的銀行を設置してはと思考する人あらんも銀行業務には一定の限度ありて零碎の資を放下するが如き複雑なる事務を執る能はざれば當地方の金融機關として其實を失ふ事なきを保せず又支那人は古來より法治の民にあらざるが故に營業法若くは定款等に拘束せらるゝ銀行よりも主人と直接縱横對話し和議協定の途ある質商の如き個人的營業に集るものなれば此處に之を推す所以なり。

然して之に要する資本金は各地の例により大洋一萬元乃至三萬元の範圍にて恰好なるべく今參考として資本金一萬五千元を以て企業する事に假定し其の收支概算を示さん。

資本金大洋一萬五千元也

内大洋二千元創業費及固定資本に充當

創業費固定資本の使途を内譯すれば

旅費、家屋修繕改造費、家具什器、新調費及び開業迄に要する創業諸費用

營業費合計大洋四千五百二十四元也(二箇年間)

内譯

名 稱	年 額	摘 要
借 家 料	六〇〇〇〇	
消 耗 品 費	三〇〇〇〇	帳簿、筆墨、紙、石油、木炭、燃料用枯草等一切
給 料	一五〇〇〇〇	内詳は次に詳記せり
食 料	一四〇四〇〇	一箇月一人の食費九元と見積りをしり
通 信 費	一〇〇〇〇	電報料郵便料
雜 費	六〇〇〇〇	交際費其の他の雜費
總 計	四、五二四、〇〇〇	

使用人給料内譯

名 稱	人 員	給料年額	摘 要
總 配 人	一	三六〇〇〇	店務を總括す
副 配 人	二	四二〇〇〇	總支配人を輔佐し實務に従事す経験ある者を使用す一名月二十元一名月十五元
記 帳 係	二	二四〇〇〇	帳簿整理、貨物監督等に従ふ
外 交 係	二	二四〇〇〇	信用、市況調査其の他交外事務に従事す

利率、流質期限

利率及流質期限を各地日支質商の現況に照し次の通り假定す。

小 借	夜 事	總 計
三	二	一三
七二〇〇	二二〇〇	一五〇〇〇〇
四八〇〇		

區 別	種 別	期 限	利 率
大口貸附	擔保あるもの	六箇月	月二分五厘
大口貸附	無擔保のもの	三箇月	月六分
小口貸附	擔保品を有するもの	三箇月	月一分

今之によりて資本より創業費固定資本を除きたる大洋一萬五千元を連轉するものとし當地方經濟界の状況に鑑み且つ二、三割方内輪に見積り安全率を取り其の轉用を豫想すれば左の如し。

抵當品を有する大口貸附年延高

大洋九萬六千元

林四郎方面に於ける邦人發展状況

無抵當大口貸附年延高

大洋三萬六千元

小口質貸出年延高

同 二萬四千元

收支決算

收入總計大洋六千九百六十元也

内 譯(極て内輪に見積りあれば努力如何により増收の見込充分)

大口擔保品附利息年額

大洋二千四百元

大口無擔保利息年額

同 二千四百元

小質利息年額

同 二千四百元

支出總計大洋六千五百二十四元

内 譯(安全な期せんがため充分に見積りおきたれば節約の餘地澤山ある以上支出の恐れは断じてなし)

營業費年額

大洋四千五百二十四元

創業費(第二年度より必要なし)

同 二千元

差引利益四百三十六元

但し第一年度にのみ要する創業費も償却したる勘定なれば第二年度より大洋二千四百

三十六元以上の利益ある譯なり。

右の如き計算なれば創業費を要せざる第二年度よりは第一年度に比し運用資本も約二千元の増加となり第二年度に於て一箇年二千四百三十六元以上の純利を見るは事實易々たる事にして逐年利益を資本に加入し亦は小口放銀子を行ひ流質物を應用し古物商を營み兩替に従事し經濟關係の最も深大なる錦州、赤峰の地と爲替の便を開かば一般經濟界に對し大なる便利を能ふると共に自己も亦莫大の收利を見るに至る可し。

B. 燒酒釀造業

男女共に燒酒を最も嗜好する蒙古地帯に接近せるを以て本業は林西、經棚兩市場共大に有望ならんと考察せらる今參考として之に之が收支概算に就き記載せん(一箇年の營業に於て七日間を計算せり)

支出 大洋千六百三十七元

内 譯

糜子 代(原料) 大洋六百四十八元

一日一度の仕込に糜子四石を使用すれば一箇月百三十五石を要す代金は買入季節により毎

林西經濟方面に於ける邦人發展状況

石四元乃至八元見當なるを以て之が平均を取り六元と見做す。

桃 代(醗酵原料) 大洋百六十二元

一日六十本を使用し十本の價格一元

燃料 代 大洋八十一元

一日燃料として平均三元の枯草を使用す。

職工賃金 大洋七十二元

一日六人を使用し一人一箇月の食費給料合計十二元の割

馬 糧 代 大洋十元

公 賣 税 大洋百八十九元

毎百斤に對し大洋二元

釀 造 税 大洋百五十元

使用人費(職工以外) 大洋二百二十五元

支配人より夜番に至る迄合計十五人を使用し一人當り一箇月平均給料及食費十五元に見積る。

雜 費 大洋百元

通信、交際、諸會費、消耗品費等之に算入せり。

收入 大洋千八百二十二元五角也

内 譯

賣上酒代 大洋千六百六元五角

毎百斤十七元の相場一箇月釀造高九千四百五十斤あり。

蒸溜粕代 大洋二百十六元

差引利益 一班にて月大洋百八十五元五角

賣行の餘地充分にあるを以て二班にて(三班にても可なり)營業するとせば一箇月大洋三百七十一元一箇年四千四百五十二元の利益ある勘定なりと雖も新規開業に際しては右の計算以外不動産並に器具費等に要する約二萬元に對し金利又は償却費を支拂ふ計算によらざる可からず亦出來得べくんば(資本に餘裕あれば)副業として營業地附近を開墾し其の原料を農作するに於ては非常の利益を得るに至るべく或は搾り粕を應用し養豚を行ふ亦可ならず哉。

C. 雜貨商

此の業も現在將來共に有望たり若し之を余が調査區域内に實行せんとすれば先づ本店を林西に置き支店を經棚に設置するを得策とす然して之に要する資本金は周圍の商況より打算するに大洋一萬五千元乃至三萬元を以て適當なりと認む本業に關する詳細なる調査に至りては滿蒙調查復命書第八林西、經棚事情に記述なしおきたれば參照相成り度く此處には余が之迄に於ける調査の經驗より選定せる販賣品の種目に就て述ぶる事とせり。

販賣に適せる商品の種別

綿	布	類	打連布、花旗布、打連絨、市布
絲	類	木綿絲、カタン絲	
綿	製	品	莫大小肌衣、靴下、男女用襪帶子、タオル
化	粧	品	石鹼、顏料油、生髮油、齒磨粉、齒楊子
陶	品	普通品(格安品)	
法瑯引洋鐵器		洗面器、鍋	
各種雜貨		白、紅、氷砂糖、果實、罐詰	

D. 製粉業と器械素麵製造業

當林西、經棚に於て製粉業に従事せんとするには燃料の關係上器械製粉によらず是非共支那在來の土法によらざる可からず。

支那人共に好で麵類を食ひ特に本地方支那人に至りては之を主食物とせるを以て其の製造盛に行はれざるも總て小規模の副業に屬するもの多し。

今參考として原料たる小麥一石に對する製粉高を示さん。

現在行はれをれる土法のまづ何等改良をなさず製造すると假定し小麥二石より麥粉二百三十斤及麩子二斗五升を製出する而して原料一石の平均相場を大洋八元と見做し麥粉の時價百斤大洋四元二角麩子一斗大洋三角なるを以て右麥粉二百三十斤及麩子賣上代より小麥一石の代價を控除し更に其れより使役せる馬或は驢の飼料を支拂ひたる殘餘を以て純利益とす余は副業として本業を營み自家用の殘餘を市場に賣出するか亦は本業とすれば之を大規模に經營し支那人殊に蒙古人に賣行き多量なる素麵製造を副業とし現在の土法に對抗するに器械製麵を行はざる相當の利益を得る事信じて疑はざる者なり。

事業の性質上莫大の利益を得る事亦は大規模の經營は不可能なるも煎餅製造副業として面

白かるべきは余の南清遊歴中同地方面に於て比較的多數の邦人が同業により相當の利益を
收めをりしを目標せし印象より打算し決して失敗に終らざるを信ず。

E. 農業と牧畜

余の調査區域内に於て農業經營に適せるは林西縣、大、小巴林兩旗の地域にして牧畜に恰
好の水あり草豐富なる地は林西、經棚、大、小巴林兩旗、西烏珠穆沁旗の各地至る處に之
れを發見するを得べし而して純農純牧に従事するも可半農半牧を營む亦決して不可とせ
ず。

牧畜に従事の傍ら副業としてコンデンスミルク亦はバター製造を營むを得べく亦た農業の兼
業として穀類賣買に従ふ之れ亦頗る有利極て有望の事業たり此の外甘草、獸皮、毛、骨の
買入、純蒙地行商等の有利なる仕事あるも之等は滿蒙調查復命書第八林西及經棚事情と去
る十一月二十六日發送せし純蒙古地帶調查旅行記に詳述し置きたれば參照ありたし。

三、邦人の企業に適する事業

前述有利事業の内邦人に適するものは質業、兩替店、燒酒釀造業、雜貨舖、製粉製麵業、

農業牧畜、バター、ミルク製造業、穀類仲買、甘草藥草、獸毛皮骨買入、草地行商等にして
殊に質屋業(當舖)に至りては當初國家に獻金若くは特殊の功勞ありたる者に限り營業資格
あるものとして許可し來りたるものなりしが現今に於ては資本金の大なる事及貸附期限を
長くする條件の下に許可なしをれるも邦人が若し開業することせば此の規定に拘束せらるゝ
恐なきを以て資本の融通を敏速ならしめんため期限を短期とし利率を比較的高くなし此の
點より生ずる利益を貸出に勉強するに於ては支那人間に同業者出現するも敵とするに足ら
ざる可く謂んや林、經の兩市場共に本業の一戸をすら數ふる事能はざる現時に於てをや。

◎好機一度逸すれば再び來らず。

◎利益獨占の好機は今なり現在なり。

右記事業に従事することせば可成の運轉資本を活潑に利用し副業に従ふを以て得策とす尙送
金の如きは將來完全なる爲替の便開かるゝ迄危険性を帶べる現金輸送或は手数料法外に高
率なる爲替送金を捨て機敏に出産物を買込適當の方面へ輸送するに於ては即ち一舉兩得の
實をあげ得べし亦邦人が普通商業を營むも製造工業に従事するも作業には成功す可しと雖
も經費を要する點に於て時々失敗を蒙る事あるを以て此の件に就ては殊に細心の注意を拂
ひ支那式を模し其他に於ては成る可く大規模とし支那式よりも文明的設備を施し合理的方

法により收利率を高め販賣は卸賣を主とする様に經營するをよしとす然して使用人は事業性質より發展方面の地理を斟酌し支那人を選定せざるべからずとす。

四、將來林西經棚方面に於ける邦人發展上

注意すべき事項

A. 林西に邦人醫院設置の急

既に將來の發展を豫想され赤峰に日本領事館の開館を見るに至り當方面の發展期して待つべきのみ乍然開發の責任を帶べる先驅の事業家に於ては人の推知し能はざる決心と非常なる苦心と努力を要し辛苦困難亦之に供ふものなれば開發第一の障害たる匪賊に對しては兎も角暫時支那當局に信賴すると共に各自相當の注意を拂ふの他なきも不時の病氣に對する準備と一は此の點に就き後顧の憂ひを絶たしめ全力を事業上に傾注せしむるの策として邦人醫師の在林を必要とす例へ此の醫師は支那人のみの患者を治療するとするも相當の收入ある可く亦間接邦人事業發達の後援となり且つ支那人間に日本帝國文明の一部を紹介する事を得べし然れども其の醫師なる者の人格に至りては天下の仁術に相當するが如く必ず一

視同仁的人たらざる可からず近時時勢の推移變遷と共に續出するが如き診察治療の術よりも反て殖利に長けたるが如き人物に至りては有害にして且つ無益なればなり。

B. 爲替機關の至急開設

現在當市場方面に發展なしつゝある邦人が商取引に際し送金なしをれるは豫想外に高率なる料金を支拂ひ支那當業者の手を借りをれるか或は冒險的現金輸送を行ひをれる状態にして之が爲め取引者相互間に於て非常なる不便を感ずるのみならず商行爲の敏活を缺き稍もすれば其の商機を失ふ等大なる打撃を蒙りをれるを以て之が圓滑を計るため爲替機械の設置は焦眉の急務たり然して此の種事業に對しては當局が若干の補助的行爲に出でん事を希望す。

滿洲に於ける諸工場

諸工場の一 (關東州内)

大正五年末日現在

順	族	工場名	所在地	設立年月	資本金	日本人	支那人	計	種類	数量	価額
野間鐵工所	野間	乃木町	乃木町	大正二年五月	1,000	10	10	20	建築材料	1,000	1,000
吉村商店	吉村	乃木町	乃木町	同 四十二年四月	8,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
武田煉瓦工場	武田	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	6,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
魁源	魁源	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
宏源	宏源	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
天乃	天乃	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
張乃	張乃	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
社乃	社乃	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
福記	福記	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
順記	順記	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
柏木	柏木	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000
雙福	雙福	乃木町	乃木町	同 四十二年五月	5,000	1	1	2	煉瓦	10,000	10,000

滿洲に於ける諸工場

諸工場の二 (附屬地)

工場名	所在地	設立年月	資本金	日本人	支那人	計	種類	数量	価額
管口煉瓦製造所	三牛家子屯	明治三十九年八月	五、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
怡順油房	新市街	同 四十二年七月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
藤山煉瓦製造所	金堡店	同 四十二年八月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
慶順油房	新市街	同 四十四年七月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
田中精米所	松樹第三區	大正三十二年十二月	一、〇〇〇	一	〇	一	精米	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
福源油房	松樹第二區	同 四年一月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
全順油房	松樹第一區	同 四年十月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
恒裕油房	九家附屬地	同 四年十二月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
入江洋行	新市街	同 五年五月	一、〇〇〇	一	〇	一	洋行	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
福泉	新市街	同 五年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
永泉	新市街	同 五年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
滿鐵遠東工場	遼陽車站街	明治四十四年四月	三、〇〇〇、〇〇〇	一	〇	一	遠東工場	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
岡田鐵道工場	遼陽車站街	同 四十二年三月	一、〇〇〇	一	〇	一	鐵道工場	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
林洋行煉瓦工場	遼陽附屬地	大正二年七月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

大正五年末日現在

工場名	所在地	設立年月	資本金	日本人	支那人	計	種類	数量	価額
街利鐵油房	鞍山站	同 三年九月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
永盛利油房	立山附屬地	同 四年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
東來酒釀造場	遼陽附屬地	同 五年十月	一、〇〇〇	一	〇	一	酒	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
增成豆油製造場	遼陽附屬地	同 四年十二月	一、〇〇〇	一	〇	一	豆油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
永隆油房	沙河附屬地	同 五年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	油	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
島谷石鹼製造所	奉天附屬地	明治四十四年八月	六、〇〇〇	一	〇	一	石鹼	六、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇
清澤鐵工所	奉天新市街	大正元年十月	一、〇〇〇	一	〇	一	鐵工	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
西宮精米所	奉天新市街	同 元年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	精米	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
奉天精米所	奉天西一條	同 元年十一月	一、〇〇〇	一	〇	一	精米	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
奉天精米所	奉天新市街	同 二年四月	一、〇〇〇	一	〇	一	精米	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
宮崎製瓦所	奉天附屬地	同 四年三月	一、〇〇〇	一	〇	一	瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
神谷燒耐公司	奉天附屬地	同 四年三月	一、〇〇〇	一	〇	一	耐	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
四海燒耐製造所	奉天附屬地	同 五年七月	一、〇〇〇	一	〇	一	耐	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
伊藤煉瓦工場	本溪湖	明治四十四年四月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
飯塚煉瓦工場	本溪湖	同 四十四年四月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
伊藤煉瓦工場	本溪湖	同 四十四年五月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
野村煉瓦工場	本溪湖	同 四十四年九月	一、〇〇〇	一	〇	一	煉瓦	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
鐵道有限公司製鐵所	本溪湖	大正四年一月	一、〇〇〇	一	〇	一	製鐵	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

一七〇

[illegible]

一七一

東		安		春 長			
小倉煉瓦工場	鐵 西	同 五年五月	同 5000	同 100	同 100	煉 瓦	(箇) 600000
日清鐵工會社	西二道街	明治四十年十月	800000	同 100	同 100	磚 寸	(噸) 200000
長春支店	西二道街	明治四十年十月	100000	同 100	同 100	磚 寸	(噸) 200000
伊藤硝子工場	旭町	大正四年六月	10000	同 100	同 100	硝子器	(箇) 200000
滿鮮鐵工所	二番通	明治四十二年八月	200000	同 100	同 100	鐵 瓦	(枚) 100000
福來窯	官有地	同 四十三年七月	10000	同 100	同 100	鐵 瓦	(枚) 100000
松村瓦製造所	上川端町	同 四十四年七月	1000	同 100	同 100	鐵 瓦	(枚) 100000
西和精米所	六番通	同 四十五年六月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 10000
安東蒸業株式會社	六道溝	大正元年十二月	100000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
大生絲廠	五番通	同 元年十二月	1000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
寺田玻璃廠	舊市街	同 二年五月	10000	同 100	同 100	硝子器	(打) 100000
建磨商會精米部	市場通	同 二年七月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
大東精米所	官有地	同 二年七月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
建磨商會營業部	官有地	同 二年九月	1000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
田中精米所	三番通	同 二年十月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
西播洋行精米所	市場通	同 二年十一月	100000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
日東洋行精米所	市場通	同 二年十二月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000
福記盛窯	山手袋下地	同 三年四月	100	同 100	同 100	煉 瓦	(枚) 100000
大森鐵工所	大和橋通	同 三年九月	10000	同 100	同 100	煉 瓦	(枚) 100000
本莊精米所	大和橋通	同 三年十一月	10000	同 100	同 100	精 米	(石) 100000

正) 魁興永織布工廠(資本銀五千圓綿布製造一日の製造高四十疋)以上支那人經營
遼陽に大業工廠(資本銀八萬圓綿布製造年生産額約八千疋)竹宣工廠(資本銀三萬元綿布製造年生産額約三千五百疋)以上支那人經營

錦州に官立織布工廠(資本銀一萬五千圓綿布製造年生産額約四千疋)第一織布工廠(資本銀一萬五千元綿布製年生産額約六千疋)第二織布工廠(資本銀一萬圓綿布製造年生産額約六千疋)集盛織布工廠(資本銀八千圓綿布製造年生産額六千疋)貧民習藝所(資本不詳綿布製造年生産額三千疋)以上支那人經營

鐵嶺に義和湧(資本金三萬五千圓燒酒釀造年生産額二萬打價格五千圓)以上邦人經營
吉林に吉林燐寸株式會社(資本金十八萬圓燐寸製造年生産額二萬一千五百二十五箱價格約十萬圓)以上邦人經營

吉林恒茂火礱公司(資本銀三十二萬圓麥粉製造年生産額二十五萬打)吉林吉福火柴公ドリジ
ン製粉會社(資本四十萬留麥粉製造一日の生産能力三千一百五十布度)滿洲製所資本八萬留
麥粉製造一日の生産能力八百四十布度)カサツキン製粉所(資本十萬留麥粉製造一日の生
産能力千五百四十布度)モスチツキ製粉所(資本十萬留麥粉製造一日の生産能力百四十

布度カサツキン油坊(資本五萬留豆、油、豆油製造一日の生産能力二千四百枚)カバルキン
油坊(資本不詳板粕及豆油製造一日の生産能力二千枚)以上露國人經營

成泰義火礱(資本二十五萬留麥粉製造一日の生産能力一千五百四十布度)成發祥火礱(資本
二十萬留麥粉製造一日の生産能力一千二百六十布度)東亞大礱(資本十二萬留麥粉製造一日
の生産能力九百十布度)以上支那人經營

一面に一面坡製粉會社(資本十萬留麥粉製造一日の生産能力二千一百布度)一面坡枚硝子製
造所(資本生産額不詳)以上露國人經營

阿什河に阿什露國製造會社(資本不詳砂糖製造年生産額十二萬布度)以上露國人經營

恒發裕火礱(資本五萬留麥粉製造一日の生産能力五百六十布度)以上支那人經營

寧古塔に長寧火礱(資本四萬留麥粉製造能力四百九十布度)裕順和火礱(資本十五萬留麥粉
製造一日の生産能力一千二百六十布度)以上支那人經營

呼蘭に永榮火礱(資本五萬留麥粉製造一日の生産能力七百七十布度)以上支那人經營

呼蘭製糖會社(資本生産額不詳)以上露國人經營

海林に孫都鄉火礱(資本五萬留麥粉製造一日の生産能力四百二十布度)以上支那人經營

富拉爾吉に廣元吉火礪(資本五萬留麥粉製造一日の生産能力三百五十布度)以上支那人經營以上既設の分其他大正六年中に設立せられたるもの或は計畫中の重なるものを舉ぐれば奉天に南滿洲製糖株式會社、東亞燐寸株式會社奉天支店、滿洲皮革株式會社、奉天化學工業會社、長春に滿洲製織會社、東華實會社、吉林に鳴緣江製材公司吉林分工場、安東に木摺製材所哈爾濱に哈爾濱製織會社、哈爾濱英支製粉會社、織布製造工場等あり。

大正七年四月

大正七年三月八日印刷
大正七年三月十日發行

關東都督府民政部殖產課

大連市東公園町十七號地

印刷人 嶺田嘉三

大連市東公園町十七號地

印刷所 株式會社 滿洲日日新聞社